

## フーコー『言葉と物』におけるコンディヤック（上）

飯 野 和 夫

### はじめに

ミシェル・フーコー（1926-1984）は、感覚論を哲学として飛躍させたコンディヤック（1715-1780）について、初期の著作、『臨床医学の誕生』（1963）<sup>(1)</sup>と『言葉と物』（1966）<sup>(2)</sup>で数多く言及している。筆者は先に『臨床医学の誕生』におけるこうした言及について検討した<sup>(3)</sup>。それをうけて、本論文では『言葉と物』における言及へと進みたい。周知のように、この書は初期のフーコーが西洋近代の思想史に正面から取り組み、そこに知の構造的変化を読み取った重要著作である。この書によれば、西欧の知の歴史において、順に、ルネサンス時代、「古典主義時代」（ほぼ17-18世紀に相当）、そして、ほぼ19世紀以降に相当する狭義の近代といった時代は、それぞれ知の基本的枠組み（エピステーメー）を異にしている。そして、この書は、特に古典主義時代と近代のエピステーメーを探り、来るべき時代の知を展望しようとするものだった。

この書において、コンディヤックは、古典主義時代の知に特徴的な思考方法の例証、代表例のように見なされている。あるいはむしろ、フーコーはコンディヤックから古典主義時代の思考方法を発想したと言えるかもしれない。この書で言及される回数を見ても、コンディヤックは、博物学者キュヴィエ（1769-1832）と並んで、最も多く言及されている。キュヴィエが19世紀近代への移行期を扱う部分（第八章「労働、生命、言語」）で集中的に取り上げられるのに対して、コンディヤックは古典主義時代の思考の典型例として、相対的に広範囲に分散して言及される<sup>(4)</sup>。では、フーコーはコンディヤックをどのように語るのか。本論文は紙幅の関係で上下の二回に分けて発表するが、今回の「上」では、『言葉と物』第三章「表象すること Représenter」における言及をたどり、次回の「下」では、第四章「語ること Parler」、第六章「交換すること Échanger」での言及を検討することにする。『言葉と物』の記述は綿密で、要約を許さない面がある。なるべく誤解を生じさせないように、本論文では要約よりも引用（ないしは抜粋）を多用することを了解願いたい。

(1)

## I. 第三章「表象すること」<sup>(1)</sup>

### 1. デカルト『精神指導の規則』——比較の展開、同一性と差異による分析まで

第三章は古典主義時代の知の基本的性格を描き出す重要な章である。フーコーはこの章で、章全体にわたって偏りなく、要所要所でコンディヤックの名前を例として挙げることになる。その回数は11回に上り、第三章第二節で直接考察の対象となるデカルトを別として、一番名前の上がる論者である。この章では直接コンディヤックから引用されることはないが、フーコーは始終コンディヤックを意識しながら章全体を書いていると考えられる。そうした事情もあり、以下、第三章の展開を大きな省略はせずに追跡することとする。

この章の第二節「秩序」の冒頭で、フーコーは、思考・文化の歴史には不連続性が認められるが、そのメカニズムはいまだ解明されていないとして、次のように提言する。「思考の考古学がさらに確実なものとなるまで、「これらの不連続性を、それらのあたえられている明白であると同時に曖昧な、経験的次元において受けいれることとしよう」(MC, p. 64-65, J, p. 76)<sup>(2)</sup>。その上でフーコーは、デカルト(1596-1650)の初期の著作『精神指導の規則』(1628年執筆、著者の生前には未刊行)(以下『規則』と略)を利用して、ルネサンス時代の後を継ぐ古典主義時代の思考についての考察を開始する。フーコーによる『規則』の分析は簡略ではあるが、古典主義時代の分析が『規則』をもって開始されるという事情を考えれば、この著作に表明された初期デカルトの思想をしっかりと踏まえた上で、フーコーの解釈を慎重に検討することが望ましい。しかし、『言葉と物』におけるコンディヤックの位置を跡づけることをねらいとする本論文では、『規則』の本格的な解釈はなしえない。『規則』についてのフーコーの解釈を筆者なりに紹介するにとどめたい<sup>(3)</sup>。

フーコーによれば、かつて16世紀には、思考は「類似 *ressemblance*」——ないしは「相似 *similitude*」——「の領域で作動」し、相似(ないし類似)が「知の形式」であったが、今や、相似(類似)はむしろ「錯誤の機会」として告発されるようになった(MC, p. 65, J, p. 76)。フーコーが例証として引くのは、『規則』の規則1の解説部分の冒頭、デカルトが類似による思考のもつ問題点を指摘した箇所である。「人々の習慣として、二つの事物 *res* のあいだに何らかの類似を認めるたびに、両者の実際に異なる点に関してさえ、一方について真と確かめた専柄を両者いずれについても主張するものである」(デカルト『精神指導の規則』規則1 [OP1, p. 77, J, p. 9]; MC, *ibid.*)<sup>(4)</sup>。フーコーによれば、『規則』の思考はすでに新たな古典主義時代の思考を体現しており、それは「類似の内に、同一性 *identité* と差異 *différence(s)*、分量 *mesure* と秩序 *ordre* といった用語で分析すべき雑然とした混合物を暴き出す」(MC, p. 66, J, p. 77)。デカルトにおいては、類似を認知する際の「比較」の行為こそがむしろ普遍化、純粹化される、という。フーコーは語る。

デカルトは、(…)〔類似を認知する〕比較という行為を普遍化し、(…) それにもっとも純粋な形態をあたえようとする。事実、われわれが「形 figure、延長 étendue、運動 mouvement、その他」——すなわち単純本性 *natures simples*<sup>(5)</sup>——を、それらを含みうるすべての基体 *sujets* のなかに見いだすのは、まさに比較によるのである。(ibid.)

このように、デカルト哲学について比較の重要性を指摘した後、フーコーは演繹あるいは推論のレベルにおいて比較を検討しようとする。デカルトを引きつつフーコーは言う。「孤立した事物 *choses* についての直観を別にすれば、あとのすべての認識は『二つあるいはそれ以上の事物の相互の比較によって得られる』〔デカルト『規則』規則14〔OP1, p. 168, J, p. 104〕〕(MC, p. 66, J, p. 77)。そして、フーコーはデカルトに従って比較の働きに分け入り、「分量」と「秩序」の比較に言及する。「比較には二つの形態があり、(…) 分量の比較 *comparaison de la mesure* と秩序の比較 *comparaison de l'ordre* である」(MC, p. 66-67, J, p. 78)。

次いで、フーコーはこれら二つの比較について順に論じるのだが、『規則』における関連する内容をあらかじめ最低限見ておくべきであろう<sup>(6)</sup>。まず、なぜ分量と秩序なのだろうか。デカルトは『規則』で、真理探究の普遍的方法のモデルとして数学を論じている。ここには、自然の物質的な諸事物は形、延長、運動などの「単純本性」（注 I-1-5 参照）に帰着させることができ、これらは数量として扱うことができるという判断があっただろう。また、方法の普遍性を求めたデカルトは、数学においても諸概念の統一を図った。詳細には立ち入れないが、小林道夫（前掲書〔注 I-1-3 参照〕、p. 327-329）によれば、デカルトにおいて、根、平方、立方といった、それまで種を異にすると考えられていた数概念が、等比級数の形で統一された。デカルトはさらに、その統一された数の概念や操作に幾何学の操作を対応づけた。こうして、結局、数論 *arithmetica*〔算術と代数学〕が扱う「数〔多さ、非連続量〕 *multitudo*」（規則14；OP1, p. 181, J, p. 117）と幾何学が扱う「量〔大きさ、連続量〕 *magnitudo*」（ibid.）との統一がなしとげられるのである。

その際、量は「単位」を立てることで数として扱われる。実際、デカルトは言っている。「連続的な量は、仮に定めた単位によって、時として全部、少なくとも部分的にはつねに、数に帰せられうる」（規則14；OP1, p. 182, J, p. 119）。なお、この前段では、そもそも量〔大きさ〕を計るということは、等しい部分に分割して数を生じさせることであるという指摘もなされている（規則14；OP1, p. 178, J, p. 114）。こうして量も数に統一され、数式の形での発展の可能性が開かれる。ところで、このような数に帰着した関係は「秩序 *ordo*」の関係としてとらえられるようだ。デカルトはすぐに続ける。「〔こうした〕単位の多さ *multitudo*〔単位の集まりである任意の数〕はある秩序にしたがって配列されることができ、「かくして分量 *mensura* の認識に関して存した困難が、ついにはただ秩序の考察のみに依存することになる」、と（OP1, p. 182, J, p. 119）<sup>(7)</sup>。デカルトにおいて、「分量」は数を生じさせるとしても、それは直

接的には大きさとしての量である。一方、数については直接的に「秩序」が問題となると思われる。

しかるに、フーコーは、通常量を対象とする「計量 *measure*」を数にもかかわらせる。フーコーにおいては、*measure* [分量ないし計量] という場合、数も含んでいるとも言えよう<sup>(8)</sup>。フーコーは自らの考え方を次のように説明している。

人は連続量 [量] あるいは非連続量 [数] を計量する *mesurer* ことができる。だがどちらの場合にも、計量の操作は、要素から全体へと向かう勘定 *compte* の場合とは違って、まず全体を考察した上で、それを部分に分割することを前提としている。この分割は最後に単位に達するが、それらの単位の内のあるもの（連続量に関するもの）は「仮に定めた」ものであり、他のもの（数あるいは非連続量に関するもの）は算術の単位である。いずれにしても、二つの量 *grandeurs* あるいは二つの数 *multiplicités* を比較するには、二つのものの分析に際して何らかの共通の単位 *unité* を適用しなければならない。(MC, p. 67, J, p. 78)

つまり、数の比較も「共通の単位」を介して行われるのであり、無媒介なものではない、とされている。もちろんここには、上で見たデカルトの「連続量」と「仮に定めた単位」についての記述の反映が見られる。フーコーは『規則』を参照しながらこうした議論をしており、デカルトを祖述ないし解釈しているつもりなのかもしれない、その場合には解釈の妥当性を問うことはできよう。しかし、量の比較同様、数の比較にも「分析」の必要を認める議論自体は興味深い。次いでフーコーは、数と量を数に帰着させ、数の優位を確認する。

したがって計量による比較 *comparaison effectuée par la mesure* は、すべての場合に、相等 *égalité* と不等 *inégalité* という算術的關係 *relations arithmétiques* に帰着する。計量は、類似したもの *semblable* を同一性と差異の計算可能な形式にしたがって分析することを可能にするのだ<sup>(7)</sup>。(MC, p. 67, J, p. 78)

数と量の比較が行き着く相等と不等の「算術的關係」は、「計算可能な形式」であろうが、フーコーはそれを同一性と差異との関係とも呼ぶ。これについては先であらためてふれたい。さて、上に見たように、デカルトにおいては、量の関係も帰着した算術的關係はすでにそのまま秩序の関係であろうが、フーコーはその点については明言せず、次にあらためて秩序の関係を検討する (*ibid.*)。

フーコーを追う前に、デカルトにおいて、分量を帰着させた数における秩序がどのように特徴づけられているか確認しておこう。量の関係においては、「二と三の間の量の比が何であるかを、ある第三項、つまり両者の共通の分量である〔仮の〕単位を考えないでは、知ることが

ない」（規則14; OP1, p. 182, J, p. 119）。一方、「この類の〔秩序の〕関係にあつては、一つの項は他の項にそれ自身で結びつき、分量におけるように第三項〔仮の単位〕を介してではない」（*ibid.*）。もっとも、「秩序を発見するには少なからぬ努力を要する」（OP1, p. 182, J, p. 118）。数における秩序関係を見いだすには思考の努力を要するであろう。「けれども、秩序が一旦発見された後、それを認識することには何らの困難もない」（OP1, p. 182, J, p. 119）。「実際私は、AとBとの間に存する秩序が何であるかを、これら両端〔の項〕 *extremum, extrema* のほか何も考慮せずに認知する」（*ibid.*）。「両端〔項〕」という言い方は、ここで考えられている数の秩序が連比であることを予想させる。実際、デカルトは連比について規則6で論じている（OP1, p. 105-108, J, p. 39-42）。秩序を知った後は、「私たちは規則7に従って容易に、秩序を与えられた諸部分を一々たどることができる」とされる（OP1, p. 182, J, p. 118-119）（ここで規則7が指示されている点については後でふれる）。

さて、デカルトが分量から秩序へと力点を移動させたのを追う形で、フーコーも結局、秩序の比較を重視することになる。フーコーは言う。

一方、秩序〔の比較〕についていえば、それは外部にある〔つまり比較の項以外の第三項としての〕単位に依拠することなく設定される。『実際私は、AとBとのあいだに存する秩序が何であるかを、これら両端項のほか何も考えずに認知する』（規則14; OP1, p. 182, J, p. 119）（MC, p. 67, J, p. 78）。

この引用の後半の、デカルトの規則14からの引用は、今見たように、実は二つの数の間の秩序を語っている。フーコーは、二つ前の引用では「二つの数 *multiplicités* を比較するには（…）何らかの共通の単位 *unité* を適用しなければならない」と語っていた。したがって、ここで「単位に依拠」しないで行われるという秩序の比較は、数の比較に当てはまらなくなってしまう（ここでもデカルト解釈の妥当性が問題となる）。ともあれ、フーコーは数の関係にはふれずに、すぐ続けて、規則6、規則7を引用する形で「事物の秩序」へと向かうことになる。この点を次に見たいが、デカルト自身も、上で見た規則14からの引用部分で、秩序に関連して規則7に言及しており、その規則7では事物が扱われている。そこで、先に規則7でのデカルトの展開を見ておこう。

規則7においては、私たちは正しい知識を得るために、目的に関係する「すべて〔の事物〕」について、「それ自身によって知られる〔直観される〕第一原理」から、「どこも中断されない思考の運動」によって推論の連鎖を正確にたどって「演繹」すること、かつ「秩序正しい *ordinata* 十分な枚举」によって「帰納」的推理をもすることが必要である、と語られている（OP1, p. 108, 110-, J, p. 43, 44-）<sup>(9)</sup>。また、事物の枚举を十分なものにするには、全事物を別々に考察せずとも、事物を部類分けして代表例を適切な「秩序に従って吟味〔考察〕」すればよ

い、ともされる (OP1, p. 113, J, p. 47)。「枚挙すべき事物のこの秩序はいろいろに定めることができ、各人の意志で決まる」とされるものの、「この秩序をより巧妙に考案するためには、規則5で述べたところを想起すべきである」(OP1, p. 113, J, p. 47-48)と、デカルトはさらに規則5の参照を求めている。その規則5においては、「複雑で不明瞭な命題」を「より単純な命題へと還元」し、次いで「最も単純な命題の直観から始めて」「他のすべての命題の認識」へと至るという、今規則7において「演繹」について見たのと同様の考察の手順が語られる(規則5 ; OP1, p. 100, J, p. 33)。結局、事物を枚挙する際も、枚挙の仕方について、演繹的な思考、つまり単純なものから複雑なものへと向かう手順での考察が求められるのである。(なお、デカルトにおいて、こうした事物にかかわる秩序、枚挙する際の秩序、先に見た数量関係における秩序など、一見して対象に関わるのか、認識行為に関わるのか分かりにくい「秩序」をどう考えるべきかは興味深いが、その検討は本論文のねらいを超えている。)

さて、フーコーは先の引用に、以下のように続ける。そこでは、今デカルトについて見た、「それ自身によって知られる第一原理」から発し、「どこも中断されない思考の運動」によって推論の連鎖を正確にたどって演繹することによって、「事物の秩序」が認識されると明言されるに至る。

諸事物の秩序を「個別に事物の本性」(規則6 ; OP1, p. 102, J, p. 36)の内に認識することはできないが、もっとも単純な事物を発見し、次にそれにもっとも近い事物を発見して、そこからもっとも複雑な諸事物にまで必ず達することができるならば、事物の秩序を認識できる。計量による比較が、まず分割、次いで共通な単位の適用を要求するのに対して、今の場合、比較することと秩序づけることは同一のことにほかならない。秩序による比較は、一つの項から他の項へ、さらに第三以下の項へと、「どこも中断されていない」(規則7 ; OP1, p. 109, J, p. 44)運動による移行を可能にする単一の行為なのである。このようにして、第一項は他のすべてから独立して直観されうる一つの本性で<sup>(10)</sup>、他の項は差異 *différence(s)* が増大するにつれて設定されるといった、そうした諸系列が設定されるのだ。(MC, p. 67, J, p. 78)

ここでは秩序は事物一般の内に求められる。すなわち「もっとも単純な事物」から「もっとも複雑な諸事物」にまで至る「事物の秩序」が問題となる。フーコーは次いで、自らのデカルト解釈を総括し、数(と量)の関係が、結局、秩序に帰着することも確認する。

量と数の計量<sup>(11)</sup>は、秩序の設定に帰着させることが可能である。算術の値はつねに一つの系列にしたがって秩序づけることができる。よって、[分量の]単位の多さ *multiplicité* [単位の集まりである任意の数]は「一つの秩序にしたがって配列され」ることができ、「かく

して分量の認識に関して存した困難が、ついにはただ秩序の考察のみに依存することになる」のである（規則14；OP1, p. 182, J, p. 119）<sup>(12)</sup>。そして、方法とその「進歩」は、まさしくこの点に存する。つまり、すべての分量（相等の関係によるあらゆる決定）を、単純なもの simple から出発してさまざまな差異を複合性の程度のようにして出現させる一つの〔秩序をもった〕系列化に帰着させるのである。類似したものは、単位と、相等 égalité・不等 inégalité の関係とにしたがって分析されたのち、明白な同一性 identité と差異 différence(s) とにしたがって分析される。この〈差異〉は、〈推論〉の秩序において dans l'ordre des inférences 思考されうるのである。（MC, p. 67-68, J, p. 78-79）

フーコーはこの部分において、分量を「相等の関係によるあらゆる決定」とゆるやかに解釈し、そうした分量を数にそして秩序へと帰着させて、事物に秩序を認める際のモデルとしていのように思われる。なお、フーコーの記述に現れる「単位」や「相等」という語は、デカルトの『規則』において数学について用いられている<sup>(13)</sup>。一方、「同一性」と「差異」という語は『規則』には現れない。フーコーは「単位」や「相当」といった語を事物一般に当てはめ、「同一性」や「差異」といった語に置き換えたように思われる。フーコーは明確にしていないが、事物における「単純なもの」、あるいはその集合に対してあらためて「同一性」を立て、その対となる「差異」とともに、広く事物一般に適応したように思われる。フーコーの議論は、デカルトの『規則』の解釈としては破格と言える面を持つように思われるが、ともあれ『規則』から、事物において認められる同一性と差異の系列をつむぎ出し、それを古典主義時代の思考方法の典型として据えようとするのである。

さて、デカルトは『規則』で、数学を真理探究の普遍的方法のモデルとして扱い、そうした数学を、数学の諸分野と区別して、mathesis universalis〔普遍数学〕とも呼んだ（規則4）。『言葉と物』でも、今後 mathesis (universalis)〔邦訳では（普遍的）マテシス〕という語が使われるようになるが、その定義ないし説明は、出現順に次のようになる。「分量と秩序に関する普遍的学問として理解されたマテシス」（MC, p. 70, J, p. 81）、「秩序に関する一般的学問としてのマテシス」（MC, p. 71, J, p. 82）、「代数学を普遍的方法とするマテシス」（MC, p. 86, J, p. 97）。こうしたマテシスについての説明からは、マテシスが数学由来の概念であることをフーコーが決して忘れていないことがうかがえる<sup>(14)</sup>。この三つ目の出現箇所では、マテシスは「さまざまな単純本性を秩序づけることが問題であるとき」に用いられるものであるとされるが<sup>(15)</sup>、他方で、「さまざまな複合的本性 natures complexes [ou composées]（経験において与えられるような表象一般）を秩序づけることが問題であるときにはタクシノミア〔分類学〕を成立させる必要がある」とされる<sup>(16)</sup>。フーコーの広く事象一般を扱おうとする態度は、マテシスからタクシノミアへ思考の展開を展望することに通じていると思われる<sup>(17)</sup>。

## 2. 秩序——分析から確実な認識へ

さて、フーコーは、『規則』におけるデカルトの方法をヒントに発想した新たな思考形態を、古典主義時代の思考一般の内に探ろうとする。

〔16世紀末まで〕長いこと知の基本的範疇——認識の形式であるとともに内容——だった類似したもの *le semblable* が、〔17世紀初頭には〕同一性と差異という用語でおこなわれる分析によって分解された。さらに、(…) 比較は秩序と関係づけられることになった。最後に、比較は (…) 思考の秩序にしたがって行われ、単純なものから複雑なものへと赴くのである。(MC, p. 68, J, p. 79)

ここで、『規則』の思考の解釈において、単純なものから複雑なものへの秩序が重視され、また「同一性と差異」という独自の見方が付け加えられていることを再確認しておこう。次いでフーコーは、デカルトに典型的に見られる新たな思考の特質によって、知の領域全般にもたらされたであろう変様を叙述する。長くなるがフーコーに語らせよう（1～5.の数字は筆者が便宜的に付した）。

この〔知の深層からの〕変様は次のように要約できるだろう。1. 第一に、類比的な階層構造に分析がとってかわったこと。(…) いまでは、あらゆる類似は比較という吟味にかけられる。すなわち、類似は、分量によって、共通の単位によって、さらに根源的には、秩序によって、同一性と相対的差異とによって、ひとつたび発見された上で、はじめて容認されるのである。2. その上、相似のたわむれ *le jeu des similitudes* はかつては無限なものであった。(…) しかしいまや、考察される総体を構成する要素すべての網羅的調査、研究される領域全体のいくつかの範疇への分節、あるいはまた、系列全体から選ばれた充分なだけ多くの点の分析といった形で、完全な列挙が可能となろうとしている。3. したがって比較は、完璧な確実さに到達することができる。(…) 完全な列挙と、それぞれの点において次の点への必然的な移行を指定する可能性とは、同一性と差異との絶対的に確実な認識を可能にするのである。(…) 4. したがって精神の活動は——これが第四の点なのだが——もはや事物を相互に〈接近させ〉(…) ることではなく、逆に、〈識別する *discerner*〉こと、いいかえれば、まず同一のものを、ついでそこから遠ざかるあらゆる段階への移行の必然性を、確定することに存するのである。(…) すなわち、直観によって事物の判明な表象を自らのものとし、系列上の一要素からその直後の要素への必然的な移行を明晰に把握することである。5. さらに最後の帰結として、認識することは識別することであるがゆえに、物語と学問とは互いに分離されるだろう。一方には博識があり、多くの著者たちが読まれ、彼らの所説のたわむれがつづくであろう。(…) このような物語と向きあい、それと共通の尺度をもたぬものとし



て、直観とその連鎖によって私たちのなしうる確実な諸判断が成立する。(MC, p. 68-70, J, p. 80-81)

このフーコーの展開全体に、先に見た「完全な列挙」などデカルトの思考の反映を見てとることができよう。次いでフーコーは、古典主義時代への転換期に起きた、認識の構造の変化と、それにとまなう言語（テキスト、語）のあり方の変化について次のように語る。

テキストは真理のしるしと形式〔として諸事物の中に発見されるべきものだったが、そう〕であることをやめる。言語〔テキスト〕はもはや、〔それまでのように〕世界の形象の一つでも、開闢以来事物に刻まれた署名でもない。〔今や〕真理は自らの顕現としるしを明証的で判明な知覚 *perception évidente et distincte* の内に見いだす。語はそれが可能な場合には真理を表現することができるが、もはや真理の標識である権利はもたない。言語は諸存在の場から退き、透明と中性の時代にはいっていく。(MC, p. 70, J, p. 81)

以上が、フーコーが「要約」(MC, p. 68, J, p. 80)する、ルネッサンスの知に取って代わった古典主義時代の知の一般的なあり方である。フーコーは次いで、「実際には、三つの事象を区別しなければならない」(MC, p. 70, J, p. 81)と言って、新たな知の発現の形態を三種類に分けて提示する。まず「機械論」である。「<1>一方には、結局のところかなり短い期間だったが（せいぜい17世紀後半）、医学や生理学などいくつかの知の領域に理論的モデルを提供する機械論があった」(ibid.)（これ以降、理解の便を図って、知の発現形態に<0>～<2>の形式で番号をふる）。機械論は事象を物理的因果関係によって説明する立場で、デカルトの自然学をその典型とする。実際、『言葉と物』でも「デカルトの機械論」という言い方がされる(MC, p. 137, 140, J, p. 148, 151)。なお、フーコーの『臨床医学の誕生』(1963)においても機械論への言及があり、こちらの書で叙述される18世紀末の医学・生理学の世界でも、機械論がいまだ底流のように流れていることが確認できる。

さて、古典主義時代の知の第二の発現形態は「経験的対象の数学化」であるとされ、そこで他の論者とともにコンディヤックの名前が現れる。フーコーが自身の思考を展開する中でコンディヤックの名前を出すのはこれが初めてである<sup>(1)</sup>。

<2>また、かなり多様な形態をとっておこなわれた、経験的対象の数学化 *mathématisation* の努力があった。その努力は、物理学の一部と天文学にとっては恒常的で連続的なものだったが、他の領域では散発的なもので、ときには現実にこころみられ（コンドルセの場合のように）、ときには探求の普遍的理想あるいは地平として提起された（コンディヤックやデステュットの場合のように）(…) (MC, p. 70, J, p. 81)

数学者、哲学者であるコンドルセ Condorcet, Nicolas de (1743-1794) は穏健共和派としてフランス革命にも参画したが、「道德政治諸科学への計算の応用」、具体的には確率論の導入を試みた<sup>(2)</sup>。一方、コンディヤックは『人間知識起源論 *Essai sur l'origine des connaissances humaines*』(1746) (以下『起源論』) で、人間の認識を発展させるために「分析」の方法を推奨し、その中で「一種の計算」を提唱した。また、晩年の『論理学 *La Logique*』(1780) では数学の方程式の解法をモデルにして推論を進めることを主張し、遺稿となった『計算の言語』(1798, 死後刊行) でも推論は計算から厳密さを学ぶべきとしている<sup>(3)</sup>。また、哲学者でジャコバン派失墜後に政治にも関わったデステュット・ド・トラシー Destutt de Tracy, Antoine (1754-1836) は、コンディヤックから大きな影響を受けていたので、今見たコンディヤックの理想を共有していたと考えられる<sup>(4)</sup>。

ここでは、今ふれたコンディヤックの「分析」について一瞥しておきたい。『起源論』でコンディヤックは次のように述べている。「分析は (…) 諸観念相互の関係や (…) 新しい観念を発見することである。(…) 分析が真理を探究するのは (…) 常に一種の計算によってである。つまり、概念 notions を組み立てたり分解したりして、目指す発見に最も適した仕方ですこれらの概念を比較するのである。」(EOC I-II-VII-66)<sup>(5)</sup>。「複合観念を (…) 正しく知ることができるのは、ただ複合観念を分析することによってである。すなわち、複合観念を、それらを構成する単純観念に帰着させ、複合観念の生成 *génération des idées complexes* の進行をたどらねばならないのである。(…) [ところで、] 分析においては、事物の生成 *génération de la chose* そのものを人は追究せざるをえない」(EOC I-III-9, 10)。コンディヤックにおいて「生成」という語は主に観念の生成について使われるが、観念の生成は、起源からの事物の生成に対応すると考えられた。また、観念を(それゆえ事物を)単純なものにまで帰着させ、生成をたどる(再構成する)といった考え方は一般的なものでもあろうが、ここに、上に見たデカルトの思想の反映を見ることも当然可能である<sup>(6)</sup>。さて、この分析の過程で行われる観念の「組み立て」、「分解」、「比較」は「計算」にもたとえられている。このコンディヤックの一節、そして諸観念の「生成」と「計算」という術語はフランスの学術界に強い影響を及ぼしていくことになるだろう。ただし、コンディヤックは「生成」と「計算」について、これ以上に展開することはなく、「分析」の方法の細部はあいまいであった<sup>(7)</sup>。

本論文 I-1 の冒頭でふれたように、『言葉と物』第三章では直接コンディヤックから引用されることはない。今筆者は『起源論』から引用したが、実はこれは、『言葉と物』と同時期に準備されていた『臨床医学の誕生』で、フーコー自身がこれらの箇所を引用していることに根拠をおいている。コンディヤックは、上でふれたように、『論理学』や『計算の言語』においても数学をモデルにして推論を進めることを提唱したが、フーコーがこれらの著作を具体的にどのように評価していたかについては、現在までのところ筆者は知りえていない。そこで、本論文では、『論理学』や『計算の言語』においても、コンディヤックは数学を「探究の普遍的

理想」と考えていた、というフーコーの簡単な評価を繰り返しておくにとどめたい。

さて、フーコーはさらに議論を進める。

しかし、<2> こうした〔数学化の〕努力にせよ<1> 機械論の試みにせよ、もっとも一般的な形態における古典主義時代の知全体が、<0> 分量と秩序に関する普遍的学問として理解された〈マテシス〉〔普遍数学〕とのあいだに維持していた関係とは、やはり混同されてはならない。（…）古典主義時代の〈エピステーメー〉にとって基本的なものは、<1> 機械論の成功や失敗、<2> 自然を数学化する権利や不可能性ではなく、18世紀末まで恒常的で損なわれることなくつづく<0> 〈マテシス〉との関係である。この関係は二つの本質的特徴を示す。（…）（MC, p. 70–71, J, p. 81–82）

上では「<2> 経験的対象の数学化」とされていたものが、ここでは「自然」の数学化とされているが、ここでいう「自然」は外的自然のみならず、人間の自然な諸能力を含み（コンディヤックらの場合）、人間が自然に形成する社会をも含む（コンドルセの場合）ようだ。さて、「マテシス *mathesis (universalis)*」は、ふつう普遍数学と和訳される西欧の古典主義時代の学問理念である。この理念は、諸学のために役立つ「秩序と分量」の学（『精神指導の規則』規則4）というデカルトの理想が起源となっていると一般に考えられている<sup>(8)</sup>。フーコーは続けて古典主義時代の知とマテシスとの関係を論じる。

この〔古典主義時代のエピステーメーとマテシスとの〕関係は二つの本質的特徴を示す。

i. 第一の特徴は、諸存在相互の関係は秩序と分量の形態のもとに思考されるが、その際、分量の問題はつねに秩序の問題に帰着させることができるという、〔先に見た〕あの基本的不均衡が付随することである。したがって、あらゆる認識と〈マテシス〉との関係は、事物のあいだに——それが計量不能な事物であっても——秩序立ったつながり *succession ordonnée* を設定する可能性としてあたえられる。（…）だが、ii. 他方において、秩序に関する一般的学問としての〈マテシス〉とのこうした関係は、知が数学に吸収されることも、可能なかぎりのあらゆる認識が数学に基礎をおくことも意味しない。それどころか、〈マテシス〉の探究との相関関係において、これまで形成も規定もされなかつたいくつかの経験的領域の出現が見られる。それらの領域のほとんどどれをとっても、機械論や数学化の痕跡を見いだすことはできまい。とはいえ、それらの領域はいずれも、秩序に関する一つの可能な学問〔マテシス〕を下地として *sur fond de...* 成立している。それらの領域は一般的意味での〈分析〕に従属するが、それらの領域の特徴的な道具立て *instrument* は代数的方法なのではなく、記号の体系ということである。このようにして、語、諸存在、必要のそれぞれの領域における秩序の学 *sciences de l'ordre* である、一般文法、博物学、富の分析が現れた。（MC, p. 71, J,

p. 82) (i., ii. の番号は筆者による)

マテシスとの関係の i. 第一の特徴（事物への秩序関係の設定）に基づいて、ii. 第二の特徴として、マテシスを下地として新たな「経験的領域」とそこにおける「秩序の学」が出現するのだと思われ、「二つの本質的特徴」は緊密に関連していよう。この新たな経験的諸領域における「秩序の学」は、「記号の体系」を方法とする点に特徴があるとされている（→本論文 p. 16 以下）。こうしてフーコーは記号についての考察に向かうことになる。

### 3. 記号の表象作用

フーコーによれば、16世紀までの認識において認められる、事物間の「類似」の関係とは、ある事物とその「記号」となる事物の関係であった（本論文 p. 2, p. 13 参照）。ただし、「古典主義時代の始まろうとするところで、記号は世界の一形象 figure であることをやめ、また、それが標識として示して marquer いるものに、類似 *resemblance* もしくは類縁性 *affinité* の強固な秘密の紐帯でつながれていることをやめる」（MC, p. 72, J, p. 83）という。どういうことだろうか。この点を理解するには、古典主義時代の「記号」のあり方を解明する必要があり、そのための迂路を取らなければならない。

フーコーは、古典主義時代——具体的にはこの時代の『ポール・ロワイヤル論理学』（1662）——が記号を「三つの可変要素」によって規定していることを指摘する<sup>(1)</sup>。すなわち、1. 記号と指示対象の関係 *liaison* の起源によって、2. その関係のタイプによって、3. その関係の確実性 *certitude* によって、である。第1の、記号の起源についていえば、「記号は、自然的なものか（鏡のなかの反映が実物を指示するように）、約束によるものか（ある語がある集団にとってある観念を意味するように）である」（MC, p. 72, J, p. 83）。第2の、記号のタイプについていえば、「記号は、それが指示する総体に属するか（健康の一部であるよい顔色が健康を示すように）、それと切り離されて *séparé* いるか（旧約聖書の象徴がキリストの化肉と贖罪を遠くから示す記号であるように）であろう」（*ibid.*）。第3の、記号の確実性についていえば、「記号は、その忠実さを確信できるほど恒常的である場合（たとえば呼吸が生命を指示するのがそれである）と、たんに蓋然的 *probable* である場合（蒼白い顔色と妊娠との関係）とがありうるだろう」（*ibid.*）。

フーコーが付言するところでは、「これらの〔記号と指示対象の間の〕関係は、どれも〔両者の間の〕相似を必然的に含むものではない」が、「この三つの可変要素が、類似〔相似〕にかわって経験的認識領域における記号の有効性を規定する」（*ibid.*）のである。ここからフーコーは、これらの可変要素を手がかりに、古典主義時代における記号の理解の進展を考察する。実際には、上に掲げた三要素を3、2、1の順で取り上げて考察を展開する。

(1) まずは、記号と指示対象の関係の確実性に関連した考察である。

記号は、つねに確實もしくは蓋然的なものであるから、認識の内部に自らの空間を見いださなければならない。(…)〔16世紀まで〕記号となる機能において記号を打ち立てていたのは、認識ではなく事物そのものの言語だった。ところが17世紀以後、(…)すでに〈認識〉された二つの要素のあいだに置換関係の可能性が〈認識〉された瞬間から、はじめて記号があらわれるということだ。記号は(…)、認識という行為をへずにはけっして記号として成立しないのである。(MC, p. 73, J, p. 84)

16世紀まで人々は「事物そのもの」の間に類似関係＝記号関係が実在すると考えていた。一方、古典主義時代になると、記号関係は人間による認識を前提とするもの、人間の認識の中にあるものになる。

(2) フーコーによれば、こうして「いまや〔記号の〕無限の展開」(MC, p. 74, J, p. 85)が生じることになる。この記号の空間において、記号は「それが指示するもの〔指示対象〕の一部を要素として構成するか、そのもの〔指示対象〕から今現実には切り離されているかである」(ibid.)。そして、フーコーは、記号と指示対象の関係それ自体から、記号についてのミクロな考察を展開する。ここでコンディヤックの名前が現れる。

実をいえば、この二者択一は絶対的なものではない。機能するためには、記号はそれが記号であるところのもの〔指示対象〕に a. 挿入されて *inséré* いると同時に、b. それから区別されて *distinct* いなければならないからだ。a. 事実、記号が記号であるためには、記号はそれが記号であるところのもの〔指示対象〕と同時に認識に与えられたはずである。コンディヤックが指摘するように、子供がある音声のある事物の知覚される瞬間に少なくとも一度聞いたことがなければ、この音声は子供にとってその事物の言語記号とは決してならないだろう。しかし、ある知覚の一要素がその知覚の記号となるためには、それがこの知覚の一部をなすだけでは十分でない。b. それが必要として区別され、漠然と結びついていた全体的印象から取りだされることが必要である。したがって、全体的印象が分割され、それを合成しているあの多くの錯綜した部分の一つに注意が向けられて、この部分を全体から分離してしまっていなければならない。したがって記号の成立は、分析と不可分である。分析なしに記号が出現しえない以上、記号は分析の結果である。同時にまた、記号は、ひとたび規定され分離されると新たな印象にも適用される以上、分析の手段でもあり、その場合には新たな印象に対していわば格子の役割を演じるのだ。精神が分析をおこなうがゆえに記号があらわれ、精神が記号を手にしてはいるがゆえに分析は際限なくつづく。コンディヤックからデステュット・ド・トラシーやジェランド<sup>(2)</sup>まで、記号に関する一般的学説と思考の分析能力の規定とが、なぜ同一の認識理論の内できわめて正確に重ね合わされていたか、いまや理解できるにちがいない。(MC, p. 74-75, J, p. 85-86) (a., b. の符号は筆者による)

コンディヤックはその『人間知識起源論』（1746）第二編「言語と方法について」第一部「言語の起源と進歩について」の第一章において、「〔ノアの〕大洪水の後しばらくして、男女それぞれ一人ずつの子供が、いかなる記号の使用をも知ることなく砂漠の中をさまよっていた」という想定のもとに、この子供が言語記号を獲得する過程を考察している。「彼らが一緒に生活するようになると（…）彼らが相互に交渉しあうことで、彼らは一つ一つの情念の叫び声に、そうした叫び声が自然的記号となるような知覚を結びつけたのである」（EOC II-I-2）<sup>(3)</sup>。フーコーが引用中で「子供がある音声のある事物の知覚される瞬間に少なくとも一度聞いた」と語っているのは、この箇所を指すと思われる。

引用中のコンディヤックへの二度目の言及箇所では、「記号に関する一般的学説と思考の分析能力の規定とが同一の認識理論の内で（…）重ね合わされていた」とされている。コンディヤックの場合、『人間知識起源論』が「認識理論」に相当する。そして『起源論』は「思考の分析能力」を探し「規定」しようとするものである。実際、『起源論』の主要部分である第一篇第二部「魂のさまざまな働きの分析と生成」は、分析の方法を説明し、この方法を実際に人間の魂のさまざまな働きの分析に適用するものであり、結果的に「思考の分析能力」の一つの例証ともなっている。さらに、この第二部では、人間の思考に記号が必須であること、分析は記号なくしては成立しないことが主張される。『起源論』は同時に「記号に関する一般的学説」ともなっているのである。

さて、フーコーは、記号が指示対象から b. 切り離され、区別されることのより広い意味を考える。フーコーによれば、古典主義時代の記号は、「際限なく開かれた表面にそって世界を並列化し、世界を思考するための代替物のはてしない展開を世界から出発して追求する」。また、「距離と時間をくりひろげ、一步一步それらを踏破することを可能にする。記号によって、事物は互いに区別されるものとなり、それぞれ自らの同一性の内にとどまりながら、ほどこ、そして結ばれる。西欧の理性は判断の時代に入るのである」（MC, p. 75, J, p. 86）。指示対象から切り離されるがゆえに記号は扱いやすく、記号を介した世界認識は飛躍したであろう。記号を操る認識において重要となるのは「判断」であるとされる。

(3) 次いでフーコーは、記号の可変要素の内、記号と指示対象の関係の起源——人為的か自然的か——にからめて次のように述べる。

記号が自然によってあたえられるか、人間によってつくられるかであることは、ひさしい以前（…）から知られてはいた。（…）〔16世紀において〕人為的記号は、自然的記号への忠実性によってその力を維持していたのにすぎない。（…）17世紀以後、（…）価値は逆転する。すなわち、自然的なものとしての記号は、事物から取り出された一要素以上の何ものでもなく、（…）命じられた、融通のきかぬ、不便なものであり、精神はそれを自由に使いこなすことができない。反対に、約束ごとによる記号を設定する場合、いつでも、単純で、記

憶しやすく、無数の要素に適用でき、それ自体分割と合成が可能のように、それを選ぶことができるであろう。(…) こうした記号こそが人間と動物とを区別し、想像を意志的な記憶に、自然発生的注意を反省に、本能を理性的認識に変えるのにほかならない。(MC, p. 75-76, J, p. 86-87)

上の(2)で、記号が指示対象から切り離されることの利点を見たが、ここでは同様の利点が人為的記号に特有のものであると確認される。ちなみに、引用の最後の部分はコンディヤックの『人間知識起源論』第一篇第二部第四章「記号の使用が想像、観想、記憶を発展させる真の原因である」の展開を、フーコーなりに要約したものである<sup>(4)</sup>。続けてフーコーは人為的恣意的記号の体系のもつ機能の考察へと進む。

記号の恣意的体系は、事物をその 1. もっとも単純な要素に 1'分析することを許し、1. 起源にまで 1'分解を押しすすめると同時に、2. それらの要素の組みあわせ *combinaison* が 2'いかにして可能かを示し、2. 事物の複雑性の生成 *genèse* を 2'観念のうでで理解させるものでなければならない。「恣意性」は、記号が設定された際の仕方を指示しようとするときにだけ「自然性」と対立するのである。だが、この恣意的なものは、1'分析の格子と 2'結合の空間 *espace combinatoire* でもあって、それらをとおして自然は—— 1. 起源にある印象に密着したレベルで、しかも 2. それらの印象の組みあわせのあらゆる可能な形態において——自らがあるところの姿を示すのだ。(MC, p. 76, J, p. 87) (数字はこれ以降のフーコーの展開を理解する助けとなるよう筆者がふった。1. & 2. 要素からの事物の生成と、1' & 2'記号によるその跡づけとを区別した)

実は、ここでのフーコーの展開はコンディヤックの『人間知識起源論』における認識論に即している。恣意的な記号は、ひとたび設定された後は、自然（つまり諸要素からの事物の自然な生成）に寄り添い、それを表示するものとなる。そのことは、まず事物を 1. 要素へ 1'分析し、次に 2. 事物の生成（つまりは要素の組み合わせ）を 2'跡づけることで行われる<sup>(5)</sup>。「生成」にあたる語は、フーコーでは *genèse*、コンディヤックでは *génération*（本論文 p. 10 参照）であるが、フーコーはコンディヤックの *génération* の言い換えとして *genèse* の語を使っており、二つのフランス語は同様の意味であると考えてよい<sup>(6)</sup>。さて、この 1'分析と 2'生成の跡づけの過程から、フーコーは古典主義時代の記号（言語）体系の性格を考察する。「透明な言語」という、『臨床医学の誕生』においても使われた用語も現れることになる。

記号の体系とは、その完成されたかたちにおいて、1. 要素的なものの 1'命名を可能にする単純で絶対的に透明な言語であり、同時にまた、2. すべての可能な連結 *conjonctions* を 2'

規定する操作の総体にほかならない。1. 起源のこうした 1' 探究と 2. 連合 groupements の仕方のような 2' 計算とは、私たちの眼には両立しがたいものと映り、私たちはそれらを 17, 18 世紀の思考のあいまいさ *ambiguïté* として解読しがちである。1' & 2' [記号の] 体系と 1. & 2. 自然とのあいだの遊隙 *jeu* についても同様 [にあいまいさとして解読しがち] であろう。(MC, p. 76, J, p. 87)

一つ前の引用で「2. [事物の複雑性の] 生成」とされたものを跡づける過程の操作が、ここでは「2' 計算」とされている。これら「生成」と「計算」という二つの用語はコンディヤック自身が、先に「分析」に関連して引用した部分(本論文 p. 10) で使ったものである。コンディヤックにおいて、「生成」は自然の「2. 事物の生成」であり、またそれを跡づける「2' (複合) 観念の生成」でもあった(本論文 p. 10)。また、「2' 計算」は、厳密に算術的な意味で使われるのではなく、2. 事物の生成に諮りつつ 2' 観念の要素を組み合わせる操作、ほどの意味で使われていた。結局、「2' (複合) 観念の生成」と「2' 計算」は、事物の跡づけという同じ過程を示しており、コンディヤックは 2' 観念の生成の過程に、ゆるやかな「一種の計算」を取り込もうとしていた、と考えたい<sup>(7)</sup>。

さて、両立しがたく映り、あいまいとも思われる「1' 起源の探究」と「2' 連合の計算」の関係について、フーコーは続ける。

だが実際には、17, 18 世紀の思考にとって何の矛盾もありはしない。より正確に言えば、古典主義時代の〈エピステーメ〉全体をつらぬく必然的な唯一の配置が存在する。それは、2' 全般的な計算 *calcul universel* と 1' 要素的なものの探究とが、一つの人為的体系の内部で相互依存の関係に置かれていることである。そしてこの体系は、まさに人為的であるがゆえに、1. 起源となる諸要素から 2. それらのすべての可能な組み合わせの同時性まで、1. & 2. 自然の姿をあらわしうるのにほかならない。(MC, p. 76, J, p. 87)

ここで「全般的な計算」とされるのは、「<0>〈マテシス〉を下地にして成立」する「記号の体系」(本論文 p. 11-12) が意識されてのことのように思われる。また、すぐ次に見るように、この文脈でもコンディヤックが参照されるであろう。一方で、ここに現れた「全般的な計算」も、具体的には、すぐ前で現れた「計算」と同じく、2' 観念の要素を組み合わせる操作(前段参照)ほどの意味であろう。ところで、このように解釈するに際して参考にした、コンディヤックの「一種の計算」を含む分析の考え方は、すでにフーコーによって「<2> 経験的対象の数学化の試み」としても数えられていたように思われた(本論文 p. 9-11)。ただし、こうした「<2> 数学化の試み」は「<0> [知全体と] マテシスとのあいだに維持 [された] 関係」とは「混同されてはならない」ともされていた(本論文 p. 11)。



混同されてはならないはずの「<2> 数学化の試み」と「<0> マテシスとの関係」が、コンディヤックの「一種の計算」を介してつながり合ってしまう。これは、具体的場面での数学化と、全般的な計算といった視点の違いを区別すべきということかもしれない。さて、フーコーは続けている。

古典主義時代において、記号を用いることは、(…) 自然を自らの空間のなかで展開させることを可能にする恣意的言語、1'自然の分析における最終的な項、そして2'自然の合成 composition の法則を、発見しようとしてとめることである。(…) 知はいまや一つの言語を創りださねばならないのであって、その言語はよくできている bien faite こと——すなわち、1'分析と2'組みあわせとおこなう、真の計算の言語 langue des calculs であることが必要なのだ。(MC, p. 76-77, J, p. 87-88)

「よくできた言語 langue bien faite」と「計算の言語」はともにコンディヤックの用語である。前者はコンディヤックが『論理学』（1780）第二部第五章で語った言語の理想像である。私たちは、明晰で正確な観念によって推論するために、事物の諸関係に基づいて適切に秩序立てられた名称の体系を構築すべきであり、その全体が「よくできた言語」ということになる。また、同書第二部第七章では、判断から判断へと同一性をたどることで明証的な厳格な推論が成り立つと主張するが、そうした推論を可能にする前提が「よくできた言語」であろう<sup>(8)</sup>。コンディヤックはまた、遺稿となった『計算の言語』（1798, 死後刊行）第一巻の最後の第16章において、計算と推論は思考に代数記号を使う場合と語を使う場合の違いとし、数の限られた代数記号が目前にある場合、思考は機械的直接的に働くのに対して、語は記憶によって補助されるという違いはあるが、代数記号の厳密さを模範に「よくできた言語」を目指すべきとした。一方、ここでフーコーの言う「計算の言語」は、このように計算から厳密さを学んだ言語、つまり「よくできた言語」と同じものを指すのではなかろうか。

このようにここまでの展開はコンディヤックの認識論の解釈として考えることができ、フーコーは古典主義時代の思考の典型をコンディヤックに見ていると言うことができよう。ただし、形式的には、フーコーはコンディヤックを特別視はせず、時代の思考形式を共有する論者たちの内の一人として扱っている。フーコーの意図はあくまで時代の思考形式を論じることであった。さて、続く部分でフーコーは総括的に次のように語る。

記号の体系こそが認識の内に、蓋然性、1'分析と2'結合 combinatoire、体系の正当化された恣意性を導入する。記号の体系こそが、1'起源の探究と2'計算可能性、可能な合成物を定める2'表の構成とをもって単純な要素からの2'生成過程 genèse の復元、これらを同時にもたらし。記号の体系こそが、すべての知を一個の言語活動 langage に近づけるのであり、ま

た、〔既存の〕すべての言語に、1'人為的記号 *symbols artificiels* と 2'論理的性格の操作との一体系をおきかえようとする。(MC, p. 77, J, p. 88)

蓋然性は、すでに見たように、(1) 記号と指示対象の関係の確実性にかかわるものであった(本論文 p. 12)。また、上の引用で見たように、「〔記号の〕体系と自然とのあいだの遊隙 *jeu*」(本論文 p. 16 参照, MC, p. 76, J, p. 87) にかかわるものでもあろう。「記号の体系」は、一種の言語、ただし「論理的」な言語、先に見たような「よくできた言語」として知を取り込むのである。フーコーは続ける。

古典主義時代の思考に対してそれを考古学的に可能ならしめたもののレベルで問いかけるならば、17世紀初頭における記号と類似との分離こそが、蓋然性、1'分析、2'結合、体系、そして普遍言語 *langue universelle* といった新たな形象を、互いに他を生みだしたり斥けたりする継起的テーマとしてではなく、必然性の単一な網として出現させたことに気づくのだ。そして、私たちがホップズ、パークリー、ヒューム、コンディヤックと呼ぶ個体を可能ならしめたものは、まさしくこの網にほかならない。(MC, p. 77, J, p. 88)

「普遍言語」は、デカルトが1629年11月20日付けのメルセンヌ *Mersenne, Marin* (1588-1648)宛ての手紙<sup>(9)</sup>で論評したことで知られているが、数学との類比に基づいて構想された言語の理想形である。その理念においてコンディヤックの「よくできた言語」と同様のものだが、むしろコンディヤックの理想言語の構想の方が、「普遍言語」の理念の伝統の中で生まれたのだと思われる。

#### 4. 二重化された表象

古典主義時代の思考は「記号の体系」という言葉に凝縮された。フーコーは「四 二重化された表象」で、記号の機能の本質を「表象 *représentation*」とみて、その分析を行う。「表象」という概念と用語は、『ポール・ロワイヤル論理学』(1662)に現れていたものである。ちなみにコンディヤックの『人間知識起源論』(1746)などの著作には現れない。フーコーの言うところを聞こう。

記号とその内容との関係は事物それ自体の秩序のなかでは確立されていない。今やシニフィアン〔意味するもの〕とシニフィエ〔意味されるもの〕との関係は、いかなる中間的形象も両者の出会いをもはや保証しない空間の内に宿っているのだ。それは、認識の内部において、〈ある事物〔シニフィアン〕の観念〉と〈他の事物〔シニフィエ〕の観念〉とのあいだに設けられた紐帯なのである。『ポール・ロワイヤル論理学』はそのことを語っている。「記

号は二つの観念を含む。一方において表象する事物の観念であり、他方において表象される事物の観念である。記号の本性は、前者によって後者を喚起する点にある。<sup>(1)</sup>これは記号の二元的理論であり、ルネッサンスにおける、より複雑な組織<sup>(2)</sup>とはっきりと対立する。(…)(MC, p. 77-78, J, p. 88-89)

フーコーは、少し先で、シニフィアンの観念は「二重化され」ており、「他の観念の代わりをつとめる観念の上に、その観念の表象能力の観念」が重なっているとする (MC, p. 78, J, p. 89)。フーコーはその際、『ポール・ロワイヤル論理学』の次のくだりを引いている<sup>(3)</sup>。「ある対象を、他の対象を表象するものとしてだけ見るとき、人がその対象についていただく観念は、記号であるという観念 *idée de signe* であり、この最初の対象は記号と呼ばれる」(ibid.)。つまり、フーコーは、記号が「二重化された表象 *représentation redoublée (ou dédoublée)*」を帯びているとするのである (MC, p. 77 [III-IV. 標題], 79, J, p. 88, 90)<sup>(4)</sup>。

次いでフーコーは、古典主義時代の記号の総括を、記号がもたらした「帰結」として、三点にわたって行う。第一点目は、表象作用を担う「記号の重要性」(MC, p. 79, J, p. 90)、その遍在である。コンディヤックの名前も挙げられる。

記号は (…) いまや表象作用——すなわち思考すべて——と同一のひろがりをもち、表象作用の内に宿るが、それを全体として踏破するものとなったのである。ある表象が他の表象に結びつけられ、それ自身の内にこの結びつきを表象するやいなや、そこに記号が生じる。たとえば、抽象的観念は、それが形成されるもととなった具体的知覚の記号である (コンディヤック)。(…) さまざまな想像は、それらが派生してくるさまざまな知覚の記号である (ヒューム、コンディヤック)。さまざまな感覚は互いに他の記号である (パークリー、コンディヤック)。(…) 表象作用の分析と記号の理論とは、互いに完全に浸透しあっている。(MC, p. 79, J, p. 90)<sup>(5)</sup>

ここで、「ある表象が他の表象に結びつけられ、それ自身の内にこの結びつきを表象する……」という記述が、記号につきものの、つまり記号の条件としての「二重化された表象」を指していることは明らかである。フーコーによれば、この視点から見ると、コンディヤックらの哲学において、抽象観念や想像は具体的知覚の記号に、ある感覚は他の感覚の記号になるとされる。

次いでフーコーは、古典主義時代の記号がもたらした「第二の帰結」として、この時代には、今日の私たちにとって極めて重要な、いわゆる「意味作用 *signification*」が問題とならないことを指摘する。この時代には、今見たように「表象作用の場における記号の普遍的拡張」(MC, p. 79-80, J, p. 91) が認められ、「さまざまな現象がつねに、一つの表象——それ自体に

において、またその固有の表象可能性において、完全に記号である表象——の内にしかあたえられない」(MC, p. 80, J, p. 91)。したがって「意味作用は意識のなかで限定された形象」(ibid.)となりえないとされる<sup>(6)</sup>。その上で、フーコーは古典主義時代の記号体系の特徴を次のように分析する。

意味作用を成立させる行為も、意識の内における〔意味作用の〕生成 *genèse* もない。それは、i. 記号とその ii. 内容とのあいだに、いかなる中間的要素も不透明さもないということである。それゆえ i. 記号は、記号の ii. 内容を支配しうる法則以外の法則を持たない。i. 記号の分析は、そのまま、まったく正当なものとして、記号の語ろうとする ii. ものの解読なのだ。逆に、ii. シニフィエ〔内容〕を明るみに出すことは、それを指し示す i. 記号について考察すること以外の何ものでもない。ii. 意味〔内容〕は、i. 記号の完全な〈表〉の内にあたえられるはずである。だが他方、i. 記号のこの完全な網は、ii. 意味〔内容〕の側に固有な裁断にもとづいて結びつき、分節されている。i. 記号の表は ii. 事物の〈模像〉にほかならない。意味の存在が完全に i. 記号の側にあるとしても、〔意味の〕機能は完全に ii. シニフィエ〔内容〕の側にあるわけだ。それゆえ、(…)〔古典主義時代の〕i. 言語の分析は、言語記号の抽象的理論から出発して一般文法の形態をとりながら、つねに語の ii. 意味〔内容〕を導きの糸としておこなわれるのである。(MC, p. 80-81, J, p. 91-92) (i., ii. の符号、および強調の下線は筆者が付加した)

記号と、その内容、意味機能、つまり表象された事物が「中間的要素も不透明さもなく」対応しているとされる。このように捉えられた記号は、対象としての事物の認識に適したものであるといえよう。しかし、言語による創作や表現行為までを射程に入れた記号理論とはなっていないと思われる。

次いでフーコーは、古典主義時代の記号がもたらした「第三の帰結」にふれる。ここまで見てきたような古典主義時代の「記号の二元的理論」<sup>(7)</sup>は「表象の一般的理論と根本的關係によって結ばれている」(MC, p. 81, J, p. 92)、とされる。

記号がシニフィアンとシニフィエとの純然たる結びつき〔つまり二元的〕であるならば(…)、その関係は表象の一般的な場の内部に設定されるほかない。すなわち、シニフィアンとシニフィエが結ばれているのは、両者がともに表象されている(あるいは表象されていた、もしくは表象されうる)かぎりにおいて、しかも、一方が現に他方を表象しているかぎりにおいてなのだ。したがって、記号に関する古典主義時代の理論が、それを哲学的に基礎づけ正当化するものとして、何らかの「観念学」、すなわち、単純な感覚から抽象的で複雑な観念にいたるすべての表象形態の一般的分析、を持ったのは当然のことであった。(…)

(MC, p. 81, J, p. 92) (強調引用者)

シニフィアンはシニフィエを「現に表象」するが、前提として、両者ともに「表象の一般的な場」の内に位置している必要がある、ということであろうか。そして、コンディヤックが『人間知識起源論』において行ったことは、まさに「単純な感覚から抽象的で複雑な観念にいたるすべての表象形態の一般的分析」に他ならなかった。なお、コンディヤックは「表象」という語それ自体は使っていないことを付言しておかなければならない<sup>(8)</sup>。

## 5. 類似関係の想像——生成における統一

さて、これまで見てきた古典主義時代の認識形式は、人間個人においてはどのように実現されるのか。フーコーは次にこの問題へと向かう。

認識にとって、相似は欠くことのできぬ周縁である。なぜなら、二つの事物の類似がすくなくとも両者を比較する機会を提供しなければ、両者のあいだに相等性も秩序関係も設定されえないからだ。(…)

(…)[16世紀とは違い] 今では相似は、認識がそのさまざまな関係 *relations*、分量 *mesures*、同一性 *identités* を設定する場となる未分化でゆれ動く不安定な背景なのである。(…) まさに類似によって、表象は認識されることができ、つまり、相似であるかもしれぬ諸表象と比較され、要素（他の表象と共通な要素）に分析され、部分的同一性を呈示する他の表象と組みあわせられ、最後に秩序ある表の形に配分されることができのだ。(…)<sup>(1)</sup>

(…) 類似は想像の側に位置している。さらに正確に言えば、類似は想像の力によってしか現れず、また逆に、想像は類似を支えとすることなくしては作用しない。(…) 表象作用 *représentation* のなかに、過去の印象を再び現前させる晦冥な力 *obscur pouvoir* [想像の力] がひそんでいなければ、いかなる印象も、先行するある印象に似たものとして、もしくは似ていないものとして、あらわれることはないであろう。(…) (MC, p. 82-83, J, p. 93-94)

フーコーはこの想像の検討へと向かう。具体的な思想家の名は挙げられないが、ここでも私たちはコンディヤックを念頭に議論を迫ることができる。フーコーは次のように検討を開始する。「表象されるもののなかには、類似の執拗なつぶやきがなければならないし、表象作用のなかには、想像のつねに可能な内省 *repli* がなければならない」(MC, p. 83, J, p. 94)。実際、コンディヤックにおいて想像は、すでに蓄積されている表象（観念）を意のままに思い起こすことであり、一種の内省 *repli* の働きである<sup>(2)</sup>。フーコーは以下のように続ける。やや晦渋なくだりだが見ていこう（i., ii. の符号は筆者の付加による）。

このことから、分析の二つの方向が生じる。(…) i. 一方には、継起する表象の系列を、非顯在的だが同時的な比較の表に、いかにして転換 *renversement* しうるかを説明する分析が見いだされる。すなわち、分析する対象は、印象、覚え、想像、記憶であり、時間のなかにおける心像の力学 *mécanique* ともいえるあの無意志的基層 *fond* 全体である。ii. 他方には、事物の類似を説明する分析がある。ただし、事物が秩序づけられる以前、事物が同一の要素と相異なる要素とに分解される以前、事物の無秩序な相似が表の形に配分される以前に事物がもっていた類似、を説明する分析である。つまり、問題になるのは、なぜ事物が重なりあい、混じりあい、交錯しあった状態で与えられるのかということである。そこでは事物の本質的秩序は混乱しているのだが、その秩序は、目ざとい記憶にとっては、類似関係、漠然とした相似、暗示的機会の形で透視されるほど目につきやすい。それはなぜかということである。(MC, p. 83–84, J, p. 94–95)

この ii. の契機は、すぐ先で「消極的契機」であるともされるが、事物ないし自然を、類似をもち、目につきやすい秩序をもつものとして扱う点で一定の積極性を含んでいるだろう。フーコーは続ける。

i. 第一の系列の問題は、表象の線状の時間を潜在的要素の同時的空間に変形する積極的能力としての〈想像〉<sup>(3)</sup> についての分析論 *analytique* にほぼ照応する。ii. 第二の系列は、諸存在の表を混乱させ、それを漠然とした遠い類似をもつ表象の列というかたちに散乱させる、そうした空隙や無秩序をとまなう〈自然〉についての分析 *analyse* にほぼ照応する。

ところで、対立するこれら二つの契機（一方は、ii. 諸印象のなかにおける自然の無秩序という消極的契機であり、他方は、i. これらの印象から秩序を再構成する *reconstituer* 能力という積極的契機である）は、i.–ii. 「生成 *genèse*」という観念の内に統一を見いだすことになる。(…) (MC, p. 84, J, p. 95)

混乱状態にある諸印象から秩序の認識が「生成」していくとされる。これまでも、事物の生成に即して観念が生成すると語られてきたが（本論文 p. 10, 15–16, 17）、ここでは、人間の認識行為の具体的なプロセスについて「生成」が語られる。続けてフーコーは、i. と ii. の二つの契機が生成という観念の内に統一を見いだすには、「二種類の仕方」がありうるとする。一方は、デカルトからスピノザあたりまでの合理論者の考え方であり、人間の想像は、一方で「事物の同一性と差異を直接その分析的眞実において知覚するのを妨げ」、他方で、ちょうどその分を取り戻すかのように、「漠然と類似」した「表象を重ね合わせて」「秩序を復元」できるのだとする (*ibid.*)。いわば、想像がひとり相撲をとる図式である<sup>(4)</sup>。ここで想像は、多分に形而上学的神学的な背景の中で考えられている。しかし、こうした考え方は、古典主義時代に

あっても、社会の世俗化が進み、経験論が力を得るようになるにつれて、教養人の感覚に合わなくなっていくと思われ、実際、フーコーもこの考え方には立ち入っていない。よって、二つ目の考え方に進もう。

i. 想像の積極的契機〔の生成〕を、ii.〔事物、自然の内に認められる〕混濁した類似や、相似の曖昧なつづやきのせいにする *mis au compte de...* こともできるであろう。ii. 自然は、(…) きわめて混乱した様相を呈しており、もはや表象行為 *représentation* に対して ii. 互いに類似した事物しか提供することができない。したがって i. 表象行為は、互いに近接した内容につねに束縛されることとなり、自らを繰り返す、自らを想起し、ひとりで自らの方へと内向し *se replie naturellement sur soi*、ほとんど同一の印象を再生せしめ、かくて i. 想像を生み出すこととなる。コンディヤックとヒュームが ii. 類似と i. 想像との紐帯 *lien* を求めたのは、その多様性にもかかわらず曖昧でいわれない反復を示す ii. 自然のあの波立ち *moutonnement d'une nature* の内にてあり、自然 *une nature* がいっさいの秩序に先だつて自らに類似するという謎めいた事実の内になのだ。(…)〔この〕タイプの分析が、最初の人間(ルソー)、目覚めてゆく意識(コンディヤック)、あるいは他の世界からこの世界へ落ちてきた観察者(ヒューム)といった、神話的形態で展開されやすかったことは理解されるだろう。このような i.-ii. 生成論 *genèse* は、正確に〈創世の記〉*Genèse* それ自体に代わるものとして機能したのである。(MC, p. 84-85, J, p. 95-96)

コンディヤックらの生きた18世紀中葉において、人間の認識の成立は、類似を内蔵する自然の中での生成として考えられるようになったとされている。コンディヤックも「ii. 類似と i. 想像との紐帯」を「反復を示す ii. 自然のあの波立ちの内に」、「自然が自らに類似するという(…)事実の内に」求めたとされるが、そうした評価を裏付ける具体的な記述をコンディヤックの著作中に特定することは難しい。上のフーコーの展開は、コンディヤックらの哲学の全体的な評価と言うべきものと思われる。とはいえ、コンディヤックが認識の生成を語ったことは、すでに本論文 I-2 (p. 10)、I-3 (p. 15-16, p. 17) で見たところであり、フーコーにならって、コンディヤックが意識の「目覚めてゆく」さまを展開したと言うこともできよう。

続く部分では、追加的に、自然あるいは本性という概念が引かれ、さらに、こうした概念が成立する事情が考察される。フーコーは次のように言う。

ii. 自然 *nature* という概念、そして i. 人間の本性 *nature* という概念が古典主義時代に一定の重要性をもったのが事実だとして、(…) この二つの概念は、i. 想像と ii. 類似との i.-ii. 相互依存、あるいは i.-ii. 相互のつながりを保証する *assurer* ものとして機能している。(MC, p. 85, J, p. 96)

ここで、i.-ii. 自然あるいは本性は「概念」として、ii. 類似と i. 想像とが一つになった生成の過程を保証する機能をもつとされている。フーコーは続ける。わかりにくい部分だが見てみよう。

なるほど、i. 想像は見たところ i. 人間の本性の一特性にすぎず、ii. 類似は ii. 自然の示す一つの姿にすぎまい。だが、古典主義時代の思考に法則をあたえている考古学的網をたどってみれば、i. 人間の本性は i. 表象のあわずかなはみ出し *mince débordement* に宿り、そのはみ出しによって自らを再=現前させる *re-présenter* ことが可能となっていることが見てとれるだろう (i. 人間の本性はすべてそこにある。すなわち、適度に表象の外部にあるため、人間の本性が新たに自己を現前させる (*présenter*) ことができ、人間の本性が宿るその空白 *espace blanc* は、表象の現前 *presence* と表象の反復の「再」(*re-*) とをへだてているのだ)。(ibid.)

まず、「人間の本性」について。一見、人間の本性があつて、その一特性が i. 想像であるように思われるが、実際には「i. 人間の本性」は、表象の現前とその反復とをへだてつつ、つなぐ「空白」であるにすぎない。とはいえフーコーの言いたいことを理解するのはなかなか難しい。

続いて「ii. 自然」について。「ii. 自然の波立ち」としてすでに見たように、「ii. 自然」は、混乱ではあるが、その反復において ii. 類似を提示することだろう。フーコーはこうした点にふれた後、i.-ii. 自然と人間本性についてまとめる。

また、ii. 自然とは ii. 表象されたもの *représentation* の不可解な混乱にほかならないが、そこには ii. 類似が感知され、その後同一性の秩序が目に見えるものとなることも見てとれるであろう。i.-ii. 自然と人間の本性とは、〈エピステーメー〉の一般的布置のなかで、ii. 類似と i. 想像との調整を可能ならしめ、このことによって、秩序に関するすべての経験的学問は基礎づけられ可能とされるのだ。(ibid.)

「i.-ii. 自然と人間の本性と」が「秩序に関するすべての経験的学問」を「可能とし」「基礎づける」。表象・想像の積極的契機を保証する「人間の本性」という概念は重要であると思われるが、それも「表象のあわずかなはみ出し」「表象の外部」「表象の現前と表象の反復とをへだてる空白」に宿っているにすぎない、とされる。今だにそれは、19世紀における「人間学」のように知の中心には進出していないのである。

17世紀以来、ii. 類似は知の境界、知のもっとも低く賤しい辺境へと追いやられる。そこで ii. 類似は、i. 想像、ふたしかな反復、模糊とした類比に結びつく。そして ii. 類似は、(…)



同一性と差異と秩序との形態にしたがって展開する知の表へのぼりつめる一つの i.-ii. 生成を含蓄するのである。17世紀に基礎をおかれた秩序の学の企ては、実際ロックから〈観念学〉にいたるまで中断することなくそうだったように、認識の生成論によって裏打ちされることを含蓄していたのだ。（MC, p. 85-86, J, p. 96-97）

「ii. 自然」も「ii. 類似」も表象世界において与えられるものである。表象世界からの認識の生成が問題とされているのである。なお、フーコーの nature（自然、本性）をめぐる展開は、思想家の個人名は一切出さずに行われる。コンディヤックも nature について語るが、フーコーの解釈に沿うような記述を残しているわけではない。nature をめぐる展開も、上に見た生成の場合と同様、この時代の思想についての全般的評価であろう。

## 6. 「マテシス mathesis（普遍数学）」と「タクシノミア taxinomia（分類学）」

マテシスについてはすでに I-1, 2, 3 で見てきている。フーコーは、新たにタクシノミアの概念を提示する。

古典主義時代の〈エピステーメー〉全体を可能にしているのは、何よりもまず、それと秩序の認識との関係である。さまざまな単純本性 *natures simples*<sup>(1)</sup> を秩序づけることが問題であるときには、人は〈代数学〉を普遍的方法とする一つの〈マテシス〉に訴える。さまざまな複雑な本性 *natures complexes*（経験においてあたえられるような表象一般）を秩序づけることが問題であるときには、一つの〈タクシノミア〉を成立させる必要があり、そのためには記号の体系を設定しなければならない。（…）しかし、経験的表象がさまざまな単純本性に分析されうるはずだというそのかぎりにおいて、〈タクシノミア〉がすべて〈マテシス〉に帰着することは理解されよう。逆に明証性の知覚 *perception des évidences* が表象一般のなかでの特殊な場合にすぎない以上<sup>(2)</sup>、〈マテシス〉は〈タクシノミア〉の特殊な場合にすぎぬともいえる。同様に、思考がそれ自身で設定する記号は、いわば複雑な表象の代数学ともいうべきものを成立せしめるのである。（MC, p. 86, J, p. 97）

「さまざまな単純本性の秩序づけ」はマテシスが担い、そこでは「明証性の知覚」を特徴とする「代数学が普遍的方法」である。一方、「さまざまな複雑な本性（諸表象）の秩序づけ」はタクシノミアが担い、そこでは「複雑な表象の代数学」とも言うべき「記号の体系」が設定される必要がある、という（本論文 p. 11-12, p. 15以下を参照）。マテシスはタクシノミアの究極の目標であり、特殊形である。ところで、古典主義時代の多くの学問の当面の目標はタクシノミアであったに違いない。先には、認識にとって ii. 事物の類似と i. 想像が必要とされ、それらを結びつけるものとして i.-ii. 生成論が考えられていた（本論文 p. 23-25）。タクシノミ

アはこの延長上にあると思われる。フーコーの展開を追うことで、その点が明らかになるう。

〈タクシノミア〉はさらに〔記号の体系の設定のほかに〕二つのものを前提にしている。一つは、ii. 事物のある種の連続体（存在の非＝不連続性または充満）であり、もう一つは、存在しないものを出現させながら、まさにそのことによって連続体を明るみに出すことを可能にする、i. 想像のある種の能力である。したがって、経験的秩序に関する学問の可能性は、認識の分析を求める。——すなわち、ii. 存在の隠された連続性（そしていわば混乱したかたちであらわれている連続性）が、i. 不連続な表象の時間内での結びつきをつうじて、いかにしてii. 再構成されうるかを示す分析である。ここから、認識の起源を考察することの必要性が、古典主義時代をつうじてつねに明瞭な形であらわれることになる。(MC, p. 87, J, p. 98)

タクシノミアつまり「経験的秩序に関する学問」が必要とする「認識の分析」、あるいは「認識の起源の考察」とは、i.-ii. 生成論にほかなるまい。そして、フーコーは、これまでに見た認識論上の諸概念を、古典主義時代の認識空間の中に位置づけようとする。

このようにして、計算可能な秩序の学としての〈マテシス〉と、経験的なものの列から出発していかにして秩序が成立するかを分析する i.-ii. 〈生成論〉とが、古典主義時代の〈エピステーメ〉の両端に位置することとなる。すなわち、一方では、同一性と差異にたいする可能な操作にかかわる象徴 *symboles* が用いられ、他方では、ii. 事物の類似と i. 想像の遡行とによってしだいに蓄積された標識 *marques* が、分析の対象となるわけだ。そして、この〈マテシス〉と〈生成論〉とのあいだには、記号 *signes* ——経験的表象の全域を貫通するとはいえ、けっしてそこからあふれ出ることのない記号——の領域 *région* が広がっている。計算と生成論とに縁どられて〈表〉の空間がある。(MC, p. 87, J, p. 98)

デカルトに直接の起源をもつ合理論としてのマテシスと、経験の中から構成される生成論が対比されていると言えよう。次の段落では、マテシスにおける「計算」は「相等性の計算 *calcul des égalités*」(MC, p. 88, J, p. 98)であるとされる。生成の過程を追跡する際に行われる「要素の組み合わせ」としての計算とは性格を異にしているように思われる（本論文 p. 15-16 参照）。一方、〈生成論〉は、やはり次の段落で、「表象の生成論 *genèse des représentations*」であると確認されることになる (ibid.)。計算と生成論のあいだの「表の空間」について、フーコーは次のように続けて現段落を結ぶ。

こうした知においては、私たちの表象行為が私たちに提供しうるすべてのもの、つまりさま

さまざまな知覚、思考、欲望にたいして、それぞれ記号をあたえることが問題となる。これらの記号は、(…) 表象の総体を、(…) いくつかの領界 *plages* に分節するはずである。こうして記号は、諸表象が相互の遠近と親疎を表わす同時的体系の設定を可能にする。——したがって、時間記述 *chronologie* をはなれて諸表象の近縁関係をあきらかにし、諸表象の秩序関係を永続的な空間において復元する、そうした網を可能にする。このような様態にもとづいて、同一性と差異の表が描かれるのだ。(MC, p. 87-88, J, p. 98)

段落があらたまり、今見た記号の領域に、自然にかかわる〈博物学〉、人間の欲求にかかわる〈貨幣と価値の理論〉、人間の知覚と思考にかかわる〈一般文法〉が宿るとされる (MC, p. 88, J, p. 98)。さて、フーコーは続けて次のように論旨を展開する。

〈マテシス〉、〈タクシノミア〉、〈生成論〉という三つの概念が、別々の領域ではなく、古典主義時代における知の一般的布置 *configuration* を規定する緊密な相互依存の網を指示することが理解できよう。(MC, p. 88, J, p. 99)

フーコーは、すぐ前では「〈マテシス〉と〈生成論〉とのあいだに記号の領域が広がっている」と言っていた。一方、筆者自身は、先に、タクシノミアを生成論の延長上に実現されるものと見なした (本論文 p. 25-26)。今ここで三項関係が持ち出されるのはわかりにくい。ただし、フーコーはすぐにこれら三項の関係を説明する。〈3〉タクシノミアの側から、〈1〉マテシスや〈2〉生成論との関係を見てみよう (以後、三項とそれに関連する記述に適宜番号を振る)。

〈3〉〈タクシノミア〉は〈マテシス〉の内部に宿り、かつそれから区別されている。なぜなら、〈タクシノミア〉もまた、秩序の学——すなわち質的〈マテシス〉——だからだ。けれども、厳密な意味に理解する場合、〈1〉〈マテシス〉は、相等性の学、したがって〔二つのものごとの間の〕帰属関係 *lien d'attribution* の定立と判断の学であり、〈真理〉の学であるのに対して、〈3〉〈タクシノミア〉は、同一性と差異を扱うものであり、分節とクラスの学、〈諸存在〉に関する知なのである。同様に〈2〉生成論は、〈タクシノミア〉の内部に宿り、あるいはすくなくともそこに本源的可能性を見いだす。しかしながら、〈3〉〈タクシノミア〉が可視的差異の表を設定するのにたいして、〈2〉生成論は継起的系列を前提としている。〈3〉前者は統辞法 *syntaxe* のように、記号をその空間的同時性において扱い、〈2〉後者は、時間記述 *chronologie* のように、記号を時間の類比物 *analogon* のなかに配分する。(MC, p. 88, J, p. 99)

続く部分でフーコーは、〈3〉タクシノミアと〈1〉マテシス、〈3〉タクシノミアと〈2〉生成

論の関わり合いによって、古典主義時代の知が具体的な形を取ると言っているように思われる。フーコーは語っている。

<3> 〈タクシノミア〉は、<1-3> 〈マテシス〉との関係においては命題学に対する存在論として機能する。<2-3> 生成論にたいしては、歴史との対比における記号学として機能する。かくして<3> 〈タクシノミア〉は、<1-3> [〈マテシス〉との関係において] 諸存在の一般的法則を規定し、同時に<2-3> [生成論との関係において] 諸存在の認識が可能になる諸条件を規定する。古典主義時代における記号の理論が、<1-3> 自然そのものの認識と称する独断の様相をおびた学問と、<2-3> 時とともにしだいに唯名論的・懐疑論的になっていく表象の哲学とを同時に担いえたという事実は、まさにこのことに由来するのだ。(MC, p. 88, J, p. 99)

フーコーはここでは固有名詞を出さないが、前者<1-3> はライブニッツら合理論者、後者<2-3> はパークリー、ヒューム、そして場合によってはコンディヤックらの経験論者を想起しているのではなかろうか。次いでフーコーは、19世紀に知の新たな分割が起きることを想起し<sup>(3)</sup>、その後で次のように続ける。

いずれにしても、古典主義時代の〈エピステーメー〉は、そのもっとも一般的な配置において、<1> 〈マテシス〉、<3> 〈タクシノミア〉、<2> 〈生成論的分析 *analyse génétique*〉の連接体系として定義できるだろう。<1> どんな学問もつねに、たとえ遠いものにせよ、網羅的な秩序づけの企てをいんでいる。<2> 学問はまた、つねに、単純な諸要素とそれらの漸次的合成過程の発見をめざしている<sup>(4)</sup>。<3> そして、その中間地帯において、学問は、表——つまりそれ自体と同時的な体系の内にさまざまな知識を展開したもの——なのだ。17世紀と18世紀において、知の中心は<3> 〈表〉[タクシノミア]にほかならない。所説の次元における多くの大論争は、当然のことながら、こうした構成の折り目のなかに宿っている。(MC, p. 89, J, p. 99-100)

フーコーによれば、論争が生じたのも、「西欧文化の〈エピステーメー〉〔の内にいる認識の諸運動〕が、〔16世紀の〕記号と類似との際限のない円環を消散させたのち、〔19世紀の〕因果性と歴史との諸系列を組織するのに先だって、表のかたちをした一つの空間を開き、この空間を、秩序の計算可能な形態〔マテシス〕からもっとも複雑な表象の分析〔タクシノミア、生成論〕にいたるまで、たえず往復 *parcourir* しつづけたから」(MC, p. 89, J, p. 100)なのである。古典主義時代は「自己の知の一般的体系〔エピステーメー〕を規定できなかった」が、その体系においては、「知の暗黙の、だが不可避的な統一性を規定する、基本的な網」のごとき

ものに従って、多くの理論が相互に移動 *se déplacer* をしたとされる（MC, p. 90, J, p. 100）。

私たちは『言葉と物』第三章「表象すること」の最後に到達した。今や、「表のかたちをしたこの空間を、それがもっとも明瞭な形態で現われた分野」——言語と分類と貨幣の各理論——「において分析しなければならない」（*ibid.*）、とフーコーはいう。ただし、その際も、今し方見た理論間の往復、移動をつねに念頭に置かなければならない、とされる。ここで私たちはまたコンディヤックの名前を見いだすのである。

〔こうした往復の例として〕認識の理論、記号の理論、文法の理論のあいだでおこなわれたあの数多くの往復がある。（…）コンディヤック、デステュット・ド・トラシー、ジェランドは、認識をその条件あるいは「要素」に分解することと、言語がそのもっとも目につきやすい応用、使用例である諸記号に関する考察とを、互いに接続させておこなった。また、表象作用や記号の分析と富の分析とのあいだにも、同様に多くの往復がおこなわれた。（…）コンディヤックとデステュットは、認識と言語とに関する彼らの理論の線上に、彼らにとって政治的および道徳的価値をもつ、商業と経済とに関する理論をおいた。（MC, p. 90, J, p. 101）

コンディヤックは、デステュットとともに、認識（表象、記号）の理論、言語（文法）理論、富の分析にわたって名を挙げられている<sup>(5)</sup>。フーコーは最後に、リンネの、「自然あるいは社会のあらゆる具体的領域に同一の分布と同一の秩序を見いだそうとする」試みに、〈タクシノミア・ウニヴェルサリス〉の理想を読み取っている（MC, p. 90-91, J, p. 101）。そこには、「すべての表象がそれらを秩序づける記号に対して完全に透明になる」という「知の極限」が表出されている、とされるのである。

『言葉と物』のコンディヤック解釈を追う本論文では、続けて「下」において、第四章「語ること」、第六章「交換すること」におけるコンディヤックへの言及を検討する。

## 注

\*注で掲げる図書・論文の書誌情報については参考文献欄を参照されたい。

### はじめに

- (1) *Naissance de la clinique*, P.U.F., 1963 (1997). 邦訳『臨床医学の誕生』、みずす書房、1969. 原著と邦訳についての詳細は拙論「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」の「はじめに」への注1を参照されたい。

- (2) *Les mots et les choses — une archéologie des sciences humaines*, 1966. 補足すると、原著は初め「人文学叢書 Bibliothèque des sciences humaines」の一冊として刊行され、その後判型を小型化して「Tel 叢書 Collection Tel」に収められた。ただし、これは当初の版を縮小印刷したものであり、判型以外は全く同一である。邦訳『言葉と物』新潮社、1974。
- (3) 拙論「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」。
- (4) コンディヤックへの言及の形式別の内訳を示せば次のようになる。論述の中で名前が出る回数(略号N): 24回、引用がなされる回数(略号C): 7回、コンディヤックを参照するよう指示される回数(略号R): 5回。これを章ごとに見ると次のようになる(「略号-出現回数」の形式で示す)。序N-1、第三章「表象すること」N-10, R-1、第四章「語ること」N-6, C-5, R-4、第六章「交換すること」N-4, C-2、第七章「表象の限界」N-2、第八章「労働、生命、言語」N-1、第九章「人間とその分身」N-1。つまり、コンディヤックは、とりわけ第三章、第四章、第六章という古典主義時代の知を扱う章で言及されている。なお、コンディヤックとキュヴィエの後には言及回数にやや差がつくが、大体言及回数順に、リンネ(1707-1778)、A. スミス(1723-1790)、カント(1724-1804)、デステュット・ド・トラシ(1754-1836)、デカルト(1596-1650)、ラマルク(1744-1829)、ビュフォン(1707-1788)といった人たちがくる(これらの著作家への言及回数は、コンディヤックへのその2/3から1/2ほどになる)。

## I.

## 1.

- (1) 表象 *représentation* 記号(として働くもの)がほかのものを指示、表示する働き。結果としての意識への表れ(意識内容)を表象と呼ぶこともある。知は人為的記号の作用から成り立つと考えられるので、表象は知の働き一般を指す場合もあると考えられる。記号の働きについてこの語を用いるのは『ポール・ロワイヤル論理学』での用法に基づく。以下の注I-4-1を参照のこと。
- (2) 本論文での『言葉と物』への指示は、(MC. p. ---, J, p. ---)の形式で、順にフランス語原著、邦訳の該当ページを示す。引用する場合は邦訳を参考にしたが、筆者が訳し直した場合も多い。原文のイタリック文字と大文字で書かれた語は邦訳では区別して表記しているが、本論文ではともに〈…〉で表記した。原文がイタリック文字の場合がほとんどである。引用文中の〔 〕は筆者による補足を示す。
- (3) 『精神指導の規則』は、1628年頃までに執筆されたと推測されるラテン語によるデカルトの初期著作であり、未完成の草稿として残された(公刊はデカルト死後50年を経過した1701年)。21の「規則」とそれについての解説からなるが、規則19~21には解説が欠けている。邦訳には刊行順に野田又夫訳、山本信訳、大出晃・有働勤吉訳がある。本論文では、広く利用されてきていて、『言葉と物』の邦訳とも整合度が高い野田又夫訳(岩波文庫)を用いるが、訳文は適宜変更した。『規則』の主要な用語の本論文での訳語については、山本信訳から示唆を得、各種仏訳やその注なども参考に判断して、*ordo*(秩序)、*mensura*(分量[山本訳では「度量」])などとした。
- 『規則』の解釈については、特に日本語による次の研究書を参照した。小林道夫『デカルト哲学の体系——自然学・形而上学・道徳論』(特にI-1, III-1-3); 佐々木力『デカルトの数学思想』(特にI-4, II-8-1-Aなど)。また、本論文執筆の過程では、沢崎壮宏氏に『規則』とデカルト哲学全般にわたって教示を仰いだ。
- (4) フーコーは出典を次のように掲げている。「デカルト『哲学著作集』(パリ、1963)、第一巻、77頁。Descartes, *CŒuvres philosophiques* (Paris, 1963), t. I, p. 77.」。この『著作集』は、Ferdinand Alquiéの編集により全3巻で「Classiques Garnier」という叢書に収められている。『精神指導の規則 *Regulae ad directionem ingenii*』は、この著作集の第一巻に、Jacques Brunschwigによるフランス語訳 *Règles pour la direction de l'esprit* の形で収められている。フーコーによる『規則』への指示はすべてこの著作集による。本論文での『規則』への指示は、この著作集(OP1と略記)と野田又夫訳(岩波文庫)の該当ページを、(OP1, p. ---, J, p. ---)の形式で示す。なお、デカルトが用いる用語の原語としてはラテン語を掲げた。『規則』のラテン語版については、文献欄に掲げたCh. AdamとP. Tanneryの編集版を用いた。
- (5) デカルトは『規則』の規則8において、事物を「絶対単純本性」と「複合的本性」に分け、単純本性をさらに精神的なもの *spirituales*、物的なもの *corporeae*、どちらにも適用されるものに分けている(OP1,

p. 121-122, J, p. 56-57)。規則12においては、「単純とされる事物」——単純本性——の内、知性的なもの *intellectuales* として認識、疑い、無知、意志など、物質的なもの *materiales* として形 *figura*、延長 *extensio*、運動 *motus* など、さらにどちらにも帰される共通のものとして存在、一、持続などがあるとしている (OP1, p. 145以下, J, p. 80以下)。フーコーはその内、物的ないし物質的なものを問題としていることになる。これらは数学的に扱えるものでもある。

- (6) 『規則』における関連内容を見る前のさらなる前提として、『規則』全体の内容の概略についてもふれておこう。デカルトの構想によれば、『規則』はそれぞれ12の規則からなる三部に分かれるはずであった（規則12, OP1, p. 156-157, J, p. 91-93；規則8, OP1, p. 121-122, J, p. 56-57）。（ただし実際には第二部の途中の規則21までが立てられ、また、説明まで書かれているのは規則18までである。）そして、構想によれば、第一部（規則12まで）で扱われるのは、直観されうる「単純な諸命題」とされるが（規則12, OP1, p. 157, J, p. 92, 強調筆者、以下も同じ）、その際、対象となるのは「単純な諸本性」（注I-1-5参照）であろう（Cf. 規則6, OP1, p. 104, J, p. 38；規則8, OP1, p. 122, J, p. 56）。草稿でもある『規則』の記述は理解が難しいところも多いが、結局、第一部では、さまざまな単純な本性にかかわる単純な命題から始めて、それと比較して十全ではない「相対的なもの」（規則6, OP1, p. 102, J, p. 36）、あるいは、「複合されたもの」（規則12, OP1, p. 144, J, p. 79）、「複合的な本性」（規則8, OP1, p. 122, J, p. 56）へと到達する方法——諸事物にかかわる秩序の探究の方法——が原理的に考察されていよう。一方、第二部（規則13以降）、第三部では未知のものを求める「諸問題」を扱うとし、まず第二部では、問題として「完全に理解される」ものを扱うという（規則12, OP1, p. 157, J, p. 92）。扱われる対象は「それ自体で認識されるまったく単純な本性から演繹されるもの」としての一部の「複合的な本性」であるとされる（規則8, OP1, p. 122, J, p. 56-57, 強調筆者）。これらの問題は「たいてい抽象的で、ほとんどただ数論と幾何学によってだけ示される」という（規則12, OP1, p. 158, J, p. 93）。すなわち第二部では、たとえばある物質的な単純本性の具体的なさまざまなあり方、あり方相互の関係、それらから生じる帰結といったものを、数量として数学的に扱う仕方について原理的に考察しているように思われる。——以上のような構成の中で、第二部の規則14における数にかかわる秩序と、第一部における単純本性に基づく事物にかかわる秩序の関係が問題となりうるだろう。

『規則』第二部の理解には、武田裕紀とフレデリック・ドゥ・ビュゾンの研究が参考になる。なお、構想されるにとどまった『規則』第三部では「完全には理解されない」「諸問題」（規則12, OP1, p. 156-157, J, p. 91-93）が扱われる予定であった。ここで対象となるのは、「事物そのものの側で複合的であると経験されるような他の諸本性を前提とした」（規則8, OP1, p. 122, J, p. 57）一部の複合的諸本性——つまりは経験的な諸事物——である。

- (7) 数は独立して扱うことができるゆえに、数を「ある秩序にしたがって配列」することもできよう。たとえば、数に根、平方、立方といった関係を付与して連比として配列するならば（規則16, OP1, p. 188, J, p. 126）、それは数に秩序を与えることであろう。デカルトはまた、数を a, b といったアルファベット記号に置き換えて語ったり、そこからさらに数式化したりすることがあるが、これも秩序自体を示すためであろう。なお、*ordo* は通例「順序」と訳されるが、「小から大への数の漸進的配列」のようなものを連想させるおそれがあり、本論文では、*ordo* が事物にかかわる場合も含めて（山本信の邦訳と同様）「秩序」と訳すこととする。
- (8) ラテン語の *mensura* [分量] はフランス語では *mesure* となる。フーコーはこのフランス語を「分量」の意味に加えて、「計量」の意味でも使用する。先にふれた「分量の比較」（本論文 p. 3）と、以下に見る「計量による比較」は同じ事柄を指している。
- (9) デカルトの「枚挙」は、「問題に関係あることがらの細心正確な探求」（OP1, p. 110, J, p. 44）であり、「帰納」と呼ばれている。ただし、野田又夫によれば、この「枚挙」は、長い演繹に際して全系列をもれなくとらえることも意味するという（岩波文庫版『規則』p. 157）。
- (10) 本論文上段（p. 3）の、「孤立した事物についての直観だけを別にすれば」の部分参照のこと。
- (11) 本論文 p. 4 参照。
- (12) 本論文 p. 3 参照。
- (13) 「単位」については本論文 p. 3 を参照のこと。一方、デカルトは、数学的問題を扱う『規則』第二部で

「相等性 *aequalitas*」についてふれている。比較する二つの事項——既知のものと求めるもの——が、共通の本性を「等しく」有しているのではなく、その両項が、共通の本性を「何らかの比例に応じ」る形で有している場合には、この比例を「還元して行って、求めるものと既知のものとの間に相等性が明晰に見られるようにする」（規則14, OP1, p. 169, J, p. 64）、とされる。相等性を意味する *aequalitas*（フランス語では *égalité*）という語は「等式」という意味ももつ。デカルトは少し先で、この「比例 *proportiones* を解きほぐして等式 *aequalitates* に帰着させる」とも言っている（規則14, OP1, p. 170, J, p. 65）。簡略化された比例を含みつつ、求めるものと既知のものとの間に「相等性が見られるようにする」、これは両者の間に「等号が成り立つようにする」という意味である。

フーコーが「相等と不等の算術的關係」という場合も、「等式と不等式の算術的關係」という意味を重ね合わせてみよう。ただし、フーコーはデカルトにおけるような比例には言及せず、比例関係の問題をどこまで考えているかはわからない。

- (14) *mathesis universalis* の概念をどう解釈すべきかについては佐々木力の上掲書〔注 I-1-3参照〕の I-4-3, II-8-1-A を参照されたい。筆者としては、*mathesis* が「数学的概念」（上掲書、p. 233）でありつつ、「普遍的方法のための中心的モデル」でもある（p. 229, p. 233）という佐々木の立場が、フーコーの *mathesis* に対する態度とも近いのではないかと感じる。本論文では、*mathesis* を邦訳に従って「マテシス」と表記するが、それは「普遍数学」という意味においてである。
- (15) ここでのフーコーの記述はいまいだが、形、延長、運動など物質世界にかかわるいわゆる「単純本性」は、それぞれ仮の単位を立てて数値化して扱うことができ、個々の事例の間で秩序づけることができると考えられているのではないか。デカルトにおける単純本性については注 I-1-5も参照のこと。
- (16) 「複合的本性」は、『規則』の規則8で、「単純本性」と対照させられて現れる（OP1, p. 122, J, p. 56）。しかし、デカルトにおいては複合的本性がタクシノミアに結びつけられることはなく、議論をタクシノミアに結びつけることはフーコーの独自性である。
- (17) フーコーはなぜデカルトの諸著作の中から『規則』を取り上げたのだろうか。『規則』の草稿が著されたのは、デカルトが「生得観念」の理論を確立する以前であり、『規則』においては、単純本性などの基本的諸概念も形而上学的な基礎づけを与えられてはいない。そこでフーコーは、単純本性の諸概念は——さらにはそれに基づく複合的本性の諸概念も——諸対象を比較する認識行為の中で獲得されると、いわば経験論的に解釈した（本論文 p. 3の引用を参照のこと）。この場合、これらの諸概念は観念や記号についての現代哲学の議論に当てはめて論じることができるようになる。こうしてフーコーは、彼の理論的立場から適切に『規則』に注目したと言える。

## 2.

- (1) コンディヤックの名前は『言葉と物』の「序 *Préface*」で一度現れるが、それはコンディヤックについての俗説の内容としてである。「コンディヤックの価値論は、部分的には19世紀の限界効用学派の内に認められるとか、(…) そのように考えてもむだである」（MC, p. 14, J, p. 21）。なお、本論文では、フーコーの文章に現れるコンディヤックの名前は太文字にする。
- (2) 隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」』、第III部、とりわけ p. 270-277。コンドルセは著書『多数決の蓋然性への分析の適用の試論 *Essai sur l'application de l'analyse à la probabilité des décisions rendues à la pluralité des voix*』（1785）、あるいは「確率計算論 *Mémoire sur le calcul des probabilités*」（1781-1784）でそうした試みを行ったという。
- (3) 『論理学』については、拙論「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」の p. (10) 及び注 II-13を参照のこと。一方、『計算の言語』は、第一巻の最後の第16章「私たちが発見したいろいろな方法についての考察」において、計算と推論を「二つの働き」と見る見方を排し、むしろそれらを、思考において代数記号を使う場合と語を使う場合の違いと見ている。数の限られた代数記号を使う場合、代数記号は目の前にあり、そのため記憶はほとんど用いられず、思考は機械的に働く。語（つまり言語）を使う場合、語は記憶によって一つ一つ呼び出されなければならないが、代数記号の厳密さを模範に「よくできた言語」を目指さねばならないとされる。
- (4) 実際、デステュットは、自らの『論理学 *Logique*』（『観念学原理 *Éléments d'idéologie*』第一編第三部）（1805）



の第8章において、コンディヤックの『計算の言語』を受けて、計算と推論を対比させて論じている。Destutt de Tracy, *Logique, Œuvres complètes*, t. V, pp. 184–191, pp. 261–262. なお、Destutt de Tracyについては、松永澄夫編『哲学の歴史 第6巻 知識・経験・啓蒙』、pp. 572–597（第XIII章「観念学派とその周辺」執筆：村松正隆）で、その思想の概略を知ることができるが、数学との関係については特に言及されない。

- (5) 本論文でコンディヤックの『起源論』から引用したり、この書の参照を指示したりする場合は、版によって異なる頁は掲げず、当該箇所のパラグラフまでを略号によって示す。すなわち、まず著作名（原著タイトルの頭文字からEOC）、次にローマ数字によって順に篇（partie）、部（section）、章（chapitre）、最後にアラビア数字によってパラグラフとする（フーコーがここで指示した箇所はEOC I-II-VII-66となる）。なお、岩波文庫の邦訳『人間認識起源論』では、同じ区分を順に部、章、節と訳しているので注意されたい。
- (6) コンディヤックは『人間知識起源論』第二篇第二部第三章において、デカルトとデカルト派を論じてもいる。
- (7) コンディヤックの「分析」について、さらに詳しくは次の拙論を参照のこと。「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」（とりわけpp. (8)–(18)）。
- (8) マテシスについては本論文 p. 7でデカルトにおけるマテシスについて見たところも参照のこと。

### 3.

- (1) フーコーはこの部分に付された原注において、*Logique de Port-Royal*, I<sup>re</sup> partie, chap. IV（『ポール・ロワイヤル論理学』第一部第四章）と指示している。この書名は通称であり、刊行時の標題は次のようである。*La Logique ou l'art de penser*（『論理学、あるいは考える技術』）、Paris, 1662（増補版1683）。著者はアントワヌ・アルノー Antoine Arnauld（1612–1694）とピエール・ニコル Pierre Nicole（1625–1695）である。フーコーの指示する章は、1662年の初版の「第一部第四章」ではなく、1683年の増補版（第5版）で付け加えられて新しく「第一部第四章」となった章であり、その標題は「事物の観念と記号の観念」である（それまでの第四章は1683年版では第五章となり、それ以降、章の番号は一つずつずれる）。筆者は参考文献欄に掲げた次の二つのリプリント版を参照した。*Logique de Port-Royal; L'Art de penser, La Logique de Port-Royal*. 前者は1683年増補版のリプリントであり、後者は1662年初版のリプリントだが、その第二巻で1662年版と1683年版の異同が示されているので、1683年版の内容を知ることができる。原注が立てられた『言葉と物』の段落は、この新しい「第一部第四章」の内容を要約している。『ポール・ロワイヤル論理学』については、注 I-4-1も参照のこと。
- (2) Joseph-Marie de Gérando（1772–1842）。若くして *Des signes et de l'art de penser* [記号と考える技術について]、4 vol., 1799–1800や *De la génération des connaissances humaines* [人間の知識の生成について]、1802といった哲学書を著し、その後哲学史や博愛主義の著作を残した。
- (3) 『人間知識起源論』への指示は、まず著作名を略号（原著タイトルの頭文字からEOC）によって掲げ、次にローマ数字によって順に篇（partie）、部（section）、章（chapitre）を示し、最後にアラビア数字によってパラグラフを示す（岩波文庫の邦訳『人間認識起源論』では、同じ区分を順に部、章、節と訳しているので注意されたい）。フーコーがここで指示した箇所はEOC II-I-2となる。
- (4) この点について詳しくは次の拙論を参照のこと。「初期コンディヤックにおける人間精神の高次の機能の素描——『人間知識起源論』の出版後間もない改訂に関連して」。
- (5) 分析と生成の跡づけ。コンディヤックには、1. 分析と 2. 総合という用語法は該当しない。
- (6) たとえばフーコーは『臨床医学の誕生』第7章で語っている。「彼〔コンディヤック〕はたえず二つの作業論理、つまり生成 *genèse* の論理と計算の論理の間でためらった。ここから〔コンディヤックによる〕分析の二つの定義が出てくる。まず、〔一方の定義は〕複合観念を『それらを構成する単純観念に』帰着させ、『それら〔複合観念〕の生成 *génération* の進行をたどること」[EOC I-III-9]である。次に、〔他方の定義は〕『一種の計算によって、つまり、諸概念を組み立てたり分解したりして、目指す発見にもっとも適した仕方ですれらの概念を比較する』[EOC I-II-VII-66] ことで真理を探究することである」(*Naissance de la Clinique* [本論文「はじめに」の注1を参照]、p. 117, 邦訳旧版 p. 164 [新版 p. 200–201])。

なお、フーコーは、コンディヤックが生成をたどることと一種の計算を用いることの間で「ためらった」としているが、本文中ですぐに見るように、筆者としては、コンディヤックは事物の生成を跡づける過程にゆるやかな「一種の計算」を取り込もうとしていたと考える。なお、こうした点については、拙論「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」p. (16)-(17)を参照されたい。

- (7) 本文では「1'起源の探究」と「2'連合の計算」の関係が「あいまい」と感じられるとされるが、この「2'生成」と「2'計算」の二つの概念の間にも「あいまい」さがあるともいえ、『臨床医学の誕生』におけるフーコーは、こちらのあいまいさを問題にしていた（拙論「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」p. (14)以下）。なお、コンディヤックにおける「生成」と「計算」についてはデリダが論じている。Jacques Derrida, *L'archéologie du frivole*, Galilée, 1973/1990 [邦訳『たわいなさの考古学』、人文書院、2006]。この著作の概要については次の拙論を参照のこと。「デリダのコンディヤック論——『たわいなさの考古学』解題」。
- (8) コンディヤックの「よくできた言語」について、より詳しくは拙論「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」p. (10)を参照のこと。
- (9) Descartes, *Ceuvres philosophiques*, t. 1, p. 227-232.

#### 4.

- (1) ここでのフーコーによる『ポール・ロワイヤル論理学』からの引用は、注I-3-1で見た1683年版の「第一部第四章」の冒頭部分からなされている。少し先の引用も同じである。その冒頭部分では次のように語られる。（ここでの引用箇所は二つ目の破線部分に当たる。）

##### 「第四章 事物の観念と記号の観念

一つの対象をそれ自体において、その固有の存在において考え、その対象が表象〔代理〕representer [sic] できるものごとに精神の目を向けなければ、人がその対象についていく観念は事物の観念 *idée de chose* であり、たとえば地球や太陽といった観念である。だが、ある種の対象を、他の対象を表象するものとしてだけ見るとき、人がその対象についていく観念は、記号であるという観念 *idée de signe* であり、この最初の対象は記号と呼ばれる。ふつうこのようにして人は地図や絵を見るのである。したがって、記号は二つの観念を含む。つまり、一方において表象する事物の観念であり、他方において表象される事物の観念である。記号の本性は、前者によって後者を喚起する点にある。(…)

『ポール・ロワイヤル論理学』第一部第四章はその後、本論文3の冒頭ですぐに見た記号の三つの変要素を論じることになる。その内容は、すでにふれたように『言葉と物』の中でフーコーによって要約されている（本論文I-3の第二段落、及び注I-3-1を参照のこと）。

- (2) 「ルネッサンスにおいて、記号についての理論は、標識によって示されるもの、標識となるもの、そして後者の内に前者の標識を認知することを可能にするものという、完全に区別される三つの要素を含意していた。ところで、この最後の要素こそ類似性であった(…)」(MC, p. 78, J, p. 89)。
- (3) ここでのフーコーによる『ポール・ロワイヤル論理学』からの引用は、上の注I-3-1で訳出した箇所の一つ目の破線部分に当たる。なお、*L'Art de penser, La Logique de Port-Royal* (注I-3-1参照)の第二巻で復元された当該箇所に編者によって付された注は、ラテン教父アウグスティヌス Aurelius Augustinus (354-430)の『キリスト教の教義について *De Doctrina christiana*』第二巻第一章第一節の「記号とは、それが感官にもたらす形を超えて、その帰結として魂の中に他のものの姿を生じさせるものである」とのくだりを参照するよう求めている。記号をめぐる、古代末期のキリスト教世界の思考が古典主義時代の思考に反映しているとすれば興味深い。また、『ポール・ロワイヤル論理学』における記号の定義の背景を、『言葉と物』も視野に入れて論じた石川知広の諸研究も興味深い。
- (4) 『言葉と物』の以下の部分も参照のこと。「〔シニフィアンとなる〕この要素は何かを表象していなければならないが、さらに、この表象作用がまたこの要素の内に表象されていることが必要なのだ。(…)シニフィアンとなる観念は二重化されている。他のものの代わりをつとめる観念のうえに、その観念の表象能力の観念が重なりあっているからだ。(…)だが一方、(…)シニフィエは記号の表象作用の内部に残余も不透明さもなく宿っているのだ」(MC, p. 78, J, p. 89-90)。
- (5) 「そして、18世紀の末に、〈観念学〉が、観念と記号のいずれに優位をあたえるべきかを問題にするとき、

デステュットが、観念を定義する以前に記号の理論を立てたとしてジェランドを非難するとき、それは、すでに、観念と記号との直接的な相互依存関係が乱れはじめ、両者がたがいに他にたいしてまったく透明であることをやめようとしていることを意味するのにはかならない」（F. p. 79, J. p. 90）。

- (6) 比喩的な言い方をすれば、この時代には厚みのある人間はまだまだ存在しなかった。人間の思考は、表象作用に一般化されてしまっており、表象作用そのものの分析はまだまだ展開されるまでいかなかった。一方、19世紀近代においては表象作用が変容するであろう。こうした点についての検討は機会をあらためたい。
- (7) 「記号の二元的理論」については本節 I-4 冒頭（p. 18-19）のフーコーからの引用を参照のこと。
- (8) コンディヤックは、記号について使われて「表象する」の意味をもつ *représenter* とその関連語を、日常的な「表現する」の意味では使っている。また、ライプニッツ哲学を論じて、魂の宇宙を「表象する」能力などとして使うが（『人間知識起源論』序論）、実は、ライプニッツ自身は *percevoir* という語を使っている。

## 5.

- (1) ここでフーコーは次のように付言する。「古典主義時代の哲学（すなわち分析の哲学）における相似は、後に〔次の19世紀近代への移行期に〕批判的思考と判断の哲学において多様なものが演ずる役割と、対称的な役割を演じるわけである」。こうした点についての検討も機会をあらためたい。
- (2) コンディヤックの感覚論哲学については『人間知識起源論』、そして拙論「初期コンディヤックにおける人間精神の高次の機能の素描」を参照されたい。
- (3) コンディヤックの想像の分析については、『人間知識起源論』第一篇第二部第二、三、四、九、十章などを参照されたい。
- (4) デカルトは本論文 I-1 で見た『精神指導の規則』や『省察』（1641）の中で想像を論じている。しかし、デカルトの想像の概念や、フーコーがこの箇所ですることのデカルト解釈として妥当性を本論文で論じることができない。

## 6.

- (1) 「単純本性」については、注 I-1-5 を参照のこと。
- (2) デカルトが数学の関心に認めたような明証性を指すのであろう。デカルトの場合は、明証性は直観と演繹によって形成される。本論文 p. 5-6 参照。フーコー自身も、「同一性と差異との絶対的に確実な認識」、「直観によって事物の判明な表象を自らのものとし、系列上の一要素からその直後の要素への必然的移行を明晰に把握」、あるいは「真理は自らの顕現とししとを明証的で判明な知覚の内に見いだす」などとしていた（本論文 p. 8-9）。
- (3) 後代（19世紀）における知の新たな分割をフーコーは次のように予告する。「カントの批判哲学、そして18世紀末に西欧文化に起ったすべての出来事のあとで、新たなタイプの分割が創始された。一方において、〈マテシス〉は再編成され、命題学と存在論とを構成することとなる。今日にいたるまで形式的学問を支配してきたのはこの〈マテシス〉にほかならない。他方において、歴史と記号学〔生成論とタクシノミア〕とは（もっとも後者が前者に吸収されるのだが）、シュライヘルマッハーからニーチェ、フロイトまでその力を発揮した、解釈にかかわるあの諸学のなかに合流するのである」（MC, p. 88-89, J. p. 99）。
- (4) 本論文 I-2 参照。
- (5) フーコーは、理論間の往復、移動の例として、他にポール・ロワイヤル、ケネー、チュルゴ、アダム・スマイス、アダンソン、ルソーを挙げている。

## 参考文献

\* 本論文に直接関係するものに限定して掲げる。

フーコー Foucault, Michel

Foucault, Michel, *Les mots et les choses — une archéologie des sciences humaines*, Gallimard, 1966 (Bibliothèque des sciences

humaines), 1977 (Collection Tel). (邦訳『言葉と物——人文科学の考古学』、渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、1974)

*Naissance de la clinique*, P.U.F., 1963 (1997). (邦訳『臨床医学の誕生』、神谷美恵子訳、みすず書房、1969)

#### コンディヤック Condillac, Etienne Bonnot de

*Oeuvres philosophiques de Condillac*, éd. Georges Le Roy, P.U.F., 1948, t. I-IV (ルロワ編『コンディヤック哲学著作集』)

Tome I : *Essai sur l'origine des connaissances humaines* [人間知識起源論] (1746) (邦訳『人間認識起源論』、古茂田宏訳、岩波文庫、1994)

Tome II : *La Logique, ou les premiers développements de l'art de penser* [論理学——考える技術の初歩] (1780) (邦訳、山口裕之訳、講談社学術文庫、2016)

Tome II : *La Langue des calculs* [計算の言語] (1798)

#### デカルト Descartes

Descartes, *Règles pour la direction de l'esprit* (traduction française par J. Brunschwig), in *Œuvres philosophiques, textes établis par Ferdinand Alquie*, t. I, Paris, 1963.

*Regulae ad directionem ingenii*, in *Œuvres de Descartes*, publiées par Ch. Adam et P. Tannery, t. X, Paris, 1966.

*Règles utiles et claires pour la direction de l'esprit et la recherche de la vérité* (traduction française par J.-L. Marion), La Haye, 1977.

(邦訳、『知能指導の規則』、山本信訳、『世界の大思想 デカルト』所収、河出書房、1965 / 2004 [現行の「ワイド版」は旧版の判型を拡大した復刻版；電子版も入手可能]、『精神指導の規則』、大出晃・有働勤吉訳、『デカルト著作集4』所収、白水社、1973 / 2001 [電子版も入手可能]、『精神指導の規則』、野田又夫訳、岩波文庫、1950 / 1974)

Marion, Jean-Luc, *Sur l'ontologie grise de Descartes*, Paris, 1981.

*Sur la théologie blanche de Descartes*, Paris, 1981.

小林道夫『デカルト哲学の体系 自然学・形而上学・道徳論』、勁草書房、1995.

佐々木力『デカルトの数学思想』、東京大学出版会、2003.

フレデリック・ド・ビュゾン「デカルトの『普遍数学』概念と『精神指導の規則』第二部——数学的对象と精神の諸能力——」、『フランス哲学・思想研究』第22号、日仏哲学会、2017.

佐藤真人「デカルトのアナログア——知の統一のための比較と類比としての結合的認識法——」、『フランス哲学・思想研究』第23号、日仏哲学会、2018.

武田裕紀「デカルトにおけるマテーシスと想像力——『規則論』から『省察』へ——」、京都哲学史研究会、2018年6月9日.

#### ポール・ロワイヤル論理学 *Logique de Port-Royal*

*Logique de Port-Royal*, introduction par P. Roubinet, Lille, 1964 (réimpression de l'édition de 1683).

*L'Art de penser, La Logique de Port-Royal*, édité par B. Baron von Freytag Löringhoff et H. E. Brekle, t. 1, t. 2, Stuttgart, 1965 (réimpression de l'édition de 1662).

石川知広「『ポール＝ロワイヤル論理学』第5版増補とフランス聖体論争——その(1)、「その(2)」」、東京都立大学人文学部『人文学報』第165号、第182号、1984、1986.

「コギト、狂気、表象のキアロスクーロ——フーコー／デリダ論争から17世紀表象論へ」、東京都立大学人文学部『人文学報』第511号、2015.

#### その他

Sanci Aurelii Augustini, *De doctrina christiana, De vera religione*, in *Corpus christianorum, Series Latina, XXXII*, Turnhout (Belgium), 1962.

隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」』、名古屋大学出版会、2011.

松永澄夫編『哲学の歴史 第6巻 知識・経験・啓蒙』、中央公論新社、2007、pp. 572-597（第XIII章「観念学派とその周辺」執筆：村松正隆）

### コンディヤック研究

Jacques Derrida, *L'archéologie du frivole*, Galilée, 1973/1990 [邦訳『たわいなさの考古学』、飯野和夫訳、人文書院、2006].

飯野和夫「コンディヤック『人知起源論』に見る真理探究の方法論」、名古屋大学言語文化部『特定研究シリーズ』第5巻、1995年3月

「デリダのコンディヤック論——『たわいなさの考古学』解題」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第28巻第1号、2006年10月

「デリダのコンディヤック読解——自同性の問題を中心に」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第30巻第2号、2009年3月

「初期コンディヤックにおける人間精神の高次の機能の素描——『人間知識起源論』の出版後間もない改訂に関連して」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第35巻第1号、2013年10月

「コンディヤックの記号概念——松永澄夫氏のコンディヤック関係に論文によせて」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言語文化論集』第36巻第2号、2015年3月

「フーコー『臨床医学の誕生』におけるコンディヤック」、『名古屋大学人文学研究論集』第1号、2018年3月

キーワード：フーコー、コンディヤック、言葉と物

**Résumé**Condillac dans *Les mots et les choses* (1966) de Michel Foucault

IINO, Kazuo

*Les mots et les choses* (1966), ouvrage représentatif de la première période de Michel Foucault, explore surtout les cadres du savoir occidental de « l'âge classique » et de « l'époque moderne et contemporaine » et essaie d'envisager quelles seront les nouvelles formes du savoir dans un proche avenir. Cet ouvrage comporte beaucoup de mentions à Condillac qui développa, à l'âge classique, une philosophie sensualiste. Le présent article, qui sera publié en deux fois, tente de déterminer la position de Condillac dans cet ouvrage. Le chapitre III de celui-ci fait l'objet de la première moitié de l'article. Ce chapitre, intitulé « Représenter », est important dans la mesure où il décrit les caractéristiques fondamentales du savoir à l'âge classique. La section III du chapitre, intitulée « La représentation du signe », estime que la langue à l'âge classique devait être « une langue bien faite » ou « une langue de calcul » qui soit exacte et convenable pour décomposer et combiner des idées afin de « tracer » et de décrire des choses. Or ces deux termes sont empruntés à Condillac. La section V du chapitre, intitulée « L'imagination de la ressemblance », estime que par la répétition et la ressemblance des choses dans le monde, l'imagination produit des connaissances. Or cette vue concernant la génération ou genèse des connaissances semble être une interprétation de *l'Essai sur l'origine des connaissances humaines* de Condillac. Le développement principal du chapitre III de *Les mots et les choses* peut donc être considéré comme une interprétation de l'épistémologie de Condillac. Foucault trouve ainsi chez Condillac une manière de penser caractéristique de l'âge classique. La deuxième moitié de cet article examinera les mentions de Condillac dans les chapitres IV et VI de *Les mots et les choses*.

Keywords: Foucault, Condillac, Les mots et les choses